
リディア王国物語 王都脱出編

白石めぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リディア王国物語 王都脱出編

【Nコード】

N8774B

【作者名】

白石めぐみ

【あらすじ】

大国・リディア唯一の王位継承者・ソルデイスは父親である現国王に疎まれながら日々をすごしていた。やがて王位を継げる年齢へと達する彼の誕生日に事態は急変していく。突然起きたクーデター、父王が巡らす策謀、彼は無事、乗り越えることができるのか。

プロローグ・人物設定

リディア創世記 前文より

かつてすべては混沌と混ざり合っていた。

混沌の中でいろいろな世界は泡のように生まれ、消えていた。

やがて混沌の中に一人の『者』が生まれた。

混沌の中に生まれた『者』は孤独を嫌い、泡のように消えゆく世界に力を与えた。

壊れない『世界』はいろいろな生物を生み出す。

しかし『世界』は『者』を受け入れる力を持たなかった。

嘆いた『者』は一つの世界の中に生まれた人間というものに共鳴した。

『者』は彼らを真似し、『生み出す者』へと自分を変化させた。

そして『彼女』は世界を3つ生み出し、それを統べる者を生み出した。

一つは支配する者、『統べるべき男神』

一つは変化させる者、『人獣の神』

そして最後は調和させる者、『調和の女神』

3つの世界は三者の手により、力を増し『彼女』の孤独をいやした

(中略)

3つの世界の戦いは、『彼女』を巻き込み殺した。

『統べるべき男神』になりすました『操られし者』を止める術を持たない『調和の女神』は

やがて『改革を起こす者』の為に新しき世界を作り、そこに自らの守護者の子孫を降ろした。

一人は暗闇でも光を放つ髪を持つ『星王』

そして星王の精神を支え、安定を保つ『聖王』
彼らは女神から与えられた世界に国を作り、世界の名前を国に与え
た。

神聖王国・リディアの誕生である。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

人物紹介

《リディア王国》

ソルデイス・エンデドルグ・リグア・エリフアイド

大国リディアの王子。唯一、王位継承権を持つ。

常に笑顔を心がけ、本心を出さない。

クラウス・ガリユーゼ・ログア・エリフアイド

大国リディアの王子。王位継承権を持たない。

王位につく事より剣の道に進みたいと思っている。

サイラス・ジエラルド・ログア・エリフアイド

大国リディアの王子。王位継承権を持たない。

王位を継がせようとする父と王位を継ぐべきソルデイスとの間で

心を痛めている。

シエリルファーナ・マジエスト・ログア・エリフアイド

ソルデイス達の妹。王位継承権を持たない。

明るく天真爛漫で兄たちの心の癒しとなっている。

バルガス・エルスフィールド・ログア・エリフアイド

ソルデイス達の父親。リディア国王。王位継承権を持っていない。

王位継承権を持たない自分から生まれたソルデイスの出生を疑っ

ている。

ソフィア・レネ・エリファイド

リディア国王妃。バルガスの妻でソルデイス達の母親。

元々はロシキスの王女で、レティア達の父の従妹に当たる。

ソルデイスの出生を疑われている事に心を痛めている。

ウィルフレッド・ダイナラーデ・ログア・エリファイド

バルガスの甥。諸事情により、15歳の時、王都へと引き取られる。

アルフレッド・アーシア・レネファランド・リグア・エリファイド

光姫と呼ばれる運命を持つ姫。ウィルフレッドの妹。

バルガスの手により無理矢理、王宮に住まわされている。

精霊族でもまれなアーネル（精神バランスにより身体が変わる両性具有者）である。

常は女性体で過ごしている。

ルアンリル・フィーナ・エディン

精霊族を束ねる聖長。ソルデイスの養育係。クラウスの恋人。

精霊族によくあるフィネガ（年齢により性別を得るといふ両性具有者）であり、未だ性別は未定。

ウィルフレッド・アルフレッドの従兄弟。

フェルスリユート・ガジェット

ロシキスの王子たちを逃亡させる命令をつけた人物。

《ロシキス竜王国》

ルミエール・フィネア・ローティア

ロシキスの王女。ソルデイスの婚約者候補。

レティア・リストラル・リッカウル・ローティア
ロシキスの王の義娘。ロシキス前王の娘。王位継承権を持つ。
国竜・ルシルヴィリアを操る竜騎士。

ヘンリー・アルバルト・レイッド・ローティア
ロシキスの王子。ルミエールの弟。王位継承権を持つ。

- - - - -
- - - - -

専門用語

リディア王国

世界と同じ名を持つ国。和なる女神の補佐の血を受け継ぐ。
大地の恵みと神々の恩恵を受け、栄えている。

ロシキス竜王国

リディアの隣国。農地の乏しい山地に位置している。
その昔、リディアより竜騎士の一族が離反し、建国した。

エンデドルグ・リグア

リディアの王位継承権を持つ者だけが名乗れる名前。
エンデドルグは《意を介する者》リグアは《光を生む者》の意味。

ログア

王族の中でも王位継承権を持たない者のに付けられる名。
ログアは《残る者》の意味

リッカウル、レイッド

ロシキスの王位継承権のみが持つ事ができる名前。

レイードは《選ばれた子供》の意味。
リィカウルは《紡ぎの乙女》の意味。

リエル

聖王となる者の名につけられる。一人のリグアに対し一人のリエルが生まれる

リエルは《添う者》の意味

ディアル

星王の即位の際に《星》を降ろす役目を担う者。一人のリグアに対し一人のディアルが生まれる

ディアルは《星殖者》の意味。

光なす黄金・見透かす心

リディアの王位継承権の必須条件。

光なす黄金は髪の色。夜の闇の中でも煌めく髪を持つ。

見透かす心は、能力。読心力である。

竜緋石

ロシキスの王位継承の必須条件。

特殊な血液で、力無き者や邪悪に染まりし者が触れると灼かれる。

星王

リディア王国の王の別称。

聖王

リディア国王の精神を支える者の別称。

精霊族の名家・エディン家に生まれる事が多い。

聖長

精霊族の族長の別称。聖王以外から選ばれる。

光姫・森の精霊王

『真王』を選ぶとされる者。今は光姫しか見つからない。

聖司族

魔法を使える理力を持つ一族。

精霊族・一角獣族・竜族などが上げられる。

理力魔法

己の中の理力を利用し発動する魔法。理力の量により強い魔法が使える。

精霊魔法

精霊と契約して使う魔法。理力は必要としないため聖司族でなくとも使える。

プロローグ・人物設定（後書き）

とりあえず、リディア王国の成り立ちの神話と基本のみの人物設定を入れてみました。

小学生の頃よりノートに書きためていた話が投稿できて嬉しいです。ゆっくりと進む話ですがどうぞお楽しみ下さい。

第一話 日常の中の小さな冒険

大国・リディア。

世界と同じ名を持つその国は遙か昔、世界を作った女神の補佐をしていた者が建国したと言われている。

王国の肥沃な大地の上で栄え、その富は他の国を圧倒していた。

現国王はバルガス5世 彼は正式な王位継承権を持っていない。

彼が王位についた背景には、兄王子の駆け落ち後の早世と父王の突然の崩御があった。長老議会と聖司族の長老の判断で彼は自分の息子であるソルデイス王子が王位を継げる年齢になるまでの間、暫定的に王座につくこととなった。

バルガスは王子時代もその愚行が有名であったが、これを機に更にその行状は悪化していく。

自らの立場に都合のいい者だけを徴用し、苦言を呈す者・民衆に人気のある者に対しては何かしらの罪を付け、排除していた。

そして彼は自らの王座を長引かせる為に『王位継承の変革』を提言する。

現在の王位継承の必須条件である『光なす黄金』と『見透かす心』を排除し、長男より王位継承順位をつけるというものである。

この提言と共に彼は第一王子であるサイラス・ジエラルドを第一位王位継承者に任命し、王座は自らが死するまで自分が有すると宣言した。

これにより王宮は元来の王位継承者ソルデイス派と新たなる王位継承者サイラス派に分裂する事となる。

王子達の心に反するままに。

王宮、奥庭

少年は一人、辺りを窺っていた。

王宮の中でも特別なこの庭には自分の背丈を隠すほどの草花が植わっている。そのうえ色とりどりの花を区切るように植えられた植木は少年の身を隠すのに十分に役に立っていた。

「右よおし、左よおし」

もう一度、確認すると彼は身をかめたまま庭の奥へと一直線に走る。そして人の気配を感じそうになると植木の中に身を隠した。

少年の名はソルデイス。このリディア王国の唯一の王位継承者である。

「後、もうちよっと、だ」

あがりそうな息を整えながら、ソルデイスは目の前に近づいてきた壁を見る。

彼がその建物に気付いたのはつい先日だった。

王宮内でも王以外の者が近づけないように庭の奥に位置している高い塀に囲まれた建物。まるで牢獄のようなそれは秘密の匂い強く放っていて、少年は強く惹かれていた。

最初に近づいた時は、真正面から行き過ぎたために塀に張り付いている衛兵にあしらわれ、すぐさま庭から追い出された。

それから何度かトライしていたが、前回、やっと塀の一部にひび割れた箇所を見つけた。

その場所は塀の外も内もちょうど植木が生えており、小さな子供が一人ぐらいなら抜けられるようになっていた。

「後少しで……」

衛兵の交代の時間が近づいている。

交代は建物の入り口で行われるので、この植木に近づくには最良のタイミングだ。

彼は懐中時計を出すともう一度時間を確認する。

『今だっ！』

細心の注意で気配を読み取り、誰もいないのを確認すると彼は一気に目的の植木まで走り抜いた。

カサリ……

わずかな音と共に植木の中に身を潜めるとそのままの勢いで堀の内側へと身をねじり込ませる。

外側の植木よりも内側の植木の方が縫り大きく、ソルデイスの小さな身体は完全にその中に入った。

「よし、成功」

彼は小さくガツポーズを作る、今度は入ったばかりの堀の中を観察した。

衛兵はこの中に入ってくる事はない。

ここに入れるのは唯一、自分の父であるバルガスだけである。

彼は大切な来客があるとのことだったので、卿はここには訪れない予定だ。

つまりここには堀の中の住人だけしかいないはずである。

『さあて、どんな人が住んでいるかな』

逸る^は気持^ちを抑えつつ、彼は気配を読んでいた。

今のところ誰の気配も感じない。

堀の中の建物は一つ、思ったよりもこぢんまりとした感じの離宮のみ。彼は見つからないように離宮の壁まで歩みを進めると、窓から中を覗き込んだ。

「人、は住んでる感じなんだけど」

誰かが調理をしている匂い。

彼は壁沿いに移動し、台所の窓まで移動して再度、中を覗き込んだ。

「え？……」

そこにいたのは自分と同じ色の髪を持つ少女だった。少女と言っ

てもソルデイスよりずっと年上で17、8歳という所だろうか。

たおやかな姿態、穏やかな明るい緑色の瞳。顔立ちだって『ロシキスの薔薇』と謳われたソルデイスの母にひけは取らないだろう。

何よりも上半身を彩る自分と同じ光を放つ黄金は彼女が王族の、それも王位継承権を持つ者だと示していた。

「ど、して？」

「だれ?!」

ソルデイスの呟きに気付いた少女は驚いたようにこちらへ振り向いた。

「あ・・・え？」

ソルデイスの容姿を見た彼女は大きく眼を開き、少し後ずさった。

「あ、あの・・・ごめんなさい。僕、勝手にここに忍びこんで・・・」

少女の驚く姿に罪悪感を感じながら、ソルデイスは状況を説明しようとした。

「ソルデイス、王子？」

「あ、はい」

ソルデイスは自分の名前を呼ばれて笑顔になる。その笑顔に緊張が解けたのか、少女は彼のいる窓へと近づき、解放した。

「はじめまして、王子。私は、アーシアと申します。」

今、クッキーが焼けたところです。中に入ってお茶でもしませんか？」

彼女の申し出に王子は花も綻ぶような笑顔で頷くと先程見つけて置いた建物の入り口から中に入った。

第一話 日常の中の小さな冒険（後書き）

ソルデイスとアーシアの出会いです。

話が遅々として進まない気がしますがお許し下さい。

第二話 壁の中の光姫

小さくこじんまりとしたキッチンテーブルにソルデイスとアーシアは向かい合って座った。

「さあ、どうぞ召し上がれ」

焼きたての温もりを持ったクッキーを摘むと彼は口に放り込んだ。嫌みのない甘さが口の中に広がる。入れてくれた紅茶も極上で少年はそれだけで幸せだった。

「ソルデイス王子はどうやってこちらに入ってきたのですか？」

アーシアはソルデイスと同じように上品にクッキーを摘むと小首を傾げながら問いかけた。

ソルデイスは口の中のクッキーを飲み込むと自分が入ってきた壁の穴がある方を指さした。

「あそこに僕だけが入れるような秘密の穴があるんだ」

「まあ、よく衛兵に見つかりませんでしたね」

「いたずらっぽく笑うソルデイスにアーシアの目元も綻ぶ。」

「交代の時なら大丈夫。逆に言うと、次の交代まで僕はここから出られなくなつたともいうけど」

肩をすくめて戯けるソルデイスに彼女は「それは大変です事」と笑ってみせる。

「今日は夜まで父上は客人の相手をしなきゃいけないから、僕がここに居てもいいでしょ？」

おねだりするように首を傾げる少年王子にアーシアは苦笑をしてみせた。

愚王から生まれたとは思えない純粋な王子 父親ゆずりの

水色の瞳だがそれは『あの男』似て非なるモノで、彼女の暗澹たる心を払拭するように綺麗に輝きを放ち照らす。

「それにしても、どうして貴女はここに居るの？王族、だよな？もしかして、アルガス伯父様の？」

無邪気な感じで確信を突く質問に、アーシアは目を見張った。この王子は噂に聞くような『笑っているだけの王子』ではないのかもしれない。

彼女は注意深くソルデイスの瞳を除きながら、もう一度挨拶をした。

「そうです。アルガスの一の姫でアルフレッド・アーシアと申します。ここに居るのは……」

彼女はそこで言い淀んだ。

バルガス王に自分の存在を知られてすぐ、彼女は愛人になるようにとこの建物にいれられた。彼女のもつ体質のおかげで『女性として』愛人となる事は未だなかったがその事をこの王子に言うには少し気が引けた。

「もしかして、父様に閉じこめられているの？」

「！」

父親の性格や素行をソルデイスは誰よりもよく理解していた。

王座に固執する王位継承権を持たない王。彼は自らの在位を長引かせるため、幾度となく自分の息子である彼に刺客を送り、幾種類も毒を盛っていた。

もし彼がソルデイスと同じ王位継承権を持つ女性を見つけたら、自分の物としないはずがない。この美しい人も自らの意志を封じられ、大事な人を盾に取られてここに居るのだろう。

「私は……」

「ごめん、いやなこと訊いちゃって……ごめんなさい」

ソルデイスは動揺で目が泳いでいる彼女に深々と謝る。彼女はそんな王子に首をふることで応えた。

「いつか……僕が13歳になって王位を継げるようになったら助けてあげるね」

彼はそういうと椅子から降りて建物の出口へと向かった。このままこの場所に自分があると彼女にいやな思いをさせると思ったからだ。

「また、会いに来てくださいますか？」

アーシアはその小さな背中にか細く問いかけた。少年は驚いたように振り返ると「いいの？」と視線で問い返す。

「ここでただ一人でいて、来るのはあの人だけで・・・私は狂ってしまいそうだった・・・王子が来てくだされば、私はまだ普通にしていられます」

「わかった、じゃあ、絶対にまた会いにくるね」

王子は太陽のように笑うと来た時と同じように壁の小さな穴へと向かった。

衛兵の交代のまであまり時間がない。

彼は急いで茂みの中に身を潜めると頭だけ、壁の向こう側に出して気配を探る。時間通り、交代の衛兵は穴のある茂みの前を通り、壁の入り口へと歩いていく。

ソルデイスはタイミングを計ると、来た時と同じように奥庭の茂みを縫って自らの離宮へと走っていった。

第二話 壁の中の光姫（後書き）

まだまだクーデターは起きません。

つぎからはもっと他の人ができるようにします。

第三話 宴への誘い

「ソルデイス殿下！何処どこにお見えですか」

王城の廊下に響く呼び声に、クラウスは顔を上げた。

ここは王宮の中でも人目に付きにくい城の外壁の側だ。父親に無理矢理つけられた何かと煩めづい目付役から逃れて、クラウスはここで悠々自適に昼寝をしていた。

彼は傍らに抱いていた剣を杖に起き上がると、近場の窓から建物の中に入った。

「ルアン、どうした？」

「クラウス殿下、ソルデイス殿下を見かけられませんでしたか？」

ソルデイスを呼んでいたのは弟の教育係も兼任している聖長せいおさのルアンリル・フィーナだった。

ルアンリルは自分と親しい王子の登場にほっと息を吐くと、ソルデイスの行方を兄王子に訊く。

「いや、今日は朝から見てない。勉強をみていたんじゃないのか？」

王子の一日のスケジュールはだいたい決まっている。特に王位継承者の場合はその殆どが教育と剣術、馬術等に充てられる。

教育係もそれに添う形でスケジュールを組まれるはずだから、普通ならルアンリルがソルデイスを探していることがおかしい。

「ええ、そうです。ただ、急に陛下から呼び出しがあつて、自習を願ねがいしておいたら・・・」

「逃亡したわけだ」

「はい」

部屋を離れる時にいやな予感予感はしたのだ。

「自習しててくださいだね」というルアンリルの言葉にやけに王子は素直に頷いた。勉強嫌いめづいと回りから称されるソルデイスがおとなしくしている筈はずがなかったのだ。

「たぶん、そのうちひよっこり帰ってくるとは思っけど・・・」
もしソルデイスに逃亡されたら父王に知られればルアンリルの立場は悪くなる。

聖長という立場のために国王に苦言を呈してもさほどの罪にも問われないルアンリルは国王に取り非常に大きな目の上のたんこぶなのだ。

ましてやルアンリルはソルデイスが王位につく事を強く望んでいる。その部分でも王にとり鼻持ちならない相手である。

もしかしたら今回の呼び出しもソルデイスを逃亡させ、その責任をなんらかの形で追求しようとする王のたくらみである可能性が高い。

「おやあ。聖長どの？こんな所で如何しましたかな？」

嫌みなニュアンスを含んだ男が二人に声を掛けてきた。王の腰巾着として名高いフロウラウ卿である。

彼は常日頃と同様に数人の取り巻きを連れていた。現在王に一番目を掛けて貰っていると自負し、その権力をひけらかすためにだ。

「今はソルデイス殿下の勉強の時間ではありませんでしたかな？」

フロウラウは嘲るようにルアンリルに問いかけると、まだ幼さの残る二人を見下ろした。

聖長と名乗っていてモルアンリルはまだ15歳、一緒にいるクラウスも同じく15歳。年長のフロウラウにしてみればまだまだ世間知らずの子供である。

それなのに自分の主でもある国王に楯突くルアンリルやその顔は父親に似ていながらも早々に剣の道へと進む事を決め、国王の言う事すら耳を貸さないクラウス王子は目に余っていた。

「まさか、逃げられたとか？」

「誰に？」

嫌みの問いかけに重なるように幼い子供の声が響いた。

フロウラウが慌てて振り返ると光り輝く黄金の髪とどこまでも透き通る水色の瞳が笑いながらこちらを見ていた。

「ソルデイス殿下、こちらにおいででしたか」

ルアンリルは安堵の息を吐くと年若い王子に駆け寄った。

「うん、早めに言われていた自習の部分が終わったからちよっと食房にクッキーを取りにいってただ」

確かに彼の身体からは香しい甘い匂いがする。それ以外に草露の匂いもするがこの場は黙っていた方が得策だろう。

「で、戦利品のクッキーは？」

明るくからかう口調の兄王子にソルデイスは自分のお腹を指さした。どうやら空腹に耐えかねて食べてしまったらしい。

「で、フロウラウ卿、ルアンリルは誰に逃げられたんですか？」

にこにこ笑顔のまま問いかけてくるソルデイスにフロウラウはぐっと息を飲み込んだ。

「いや、大したことではないですよ・・・それでは」

このまま此処にいることは自分の利益にならないと踏んだフロウラウは足早にその場を去った。彼の連れていた取り巻きも悔しそうな表情を隠さず、フロウラウの後を追っていく。

「あーあ、偶然とはいえ嫌な奴に会った」

クラウスは大きく伸びをすると彼らの去った方に舌を出した。

(クラウス殿下が居たのは偶然でしょうけど、私に会ったのは・・・)

ルアンリルの失脚を誰よりも望む王のことだ、その立場を悪くするために逃亡したのを確認した後には自分を帰らせ、探しに出たのを見計らってからフロウラウを寄越したのだろう。

タイミング良く、ソルデイス王子が戻ってきてくれた事が救いだっただ。

「で、ソルデイス殿下。本当はどちらに？」

「食房でクッキーを手に入れてから裏庭で少し遊んでた・・・でも自習の部分が終わっているのは本当だからね」

ルアンリルの問いかけにソルデイスはにこやかに笑いながら応じる。どうも食えない王子である。

始終笑ってはいるが、この王子の境遇がそれほど恵まれていない事は教育係の自分がよく理解していた。

王位継承権を持たないはずのバルガス王位継承者ソルデイスを生み出さない筈の王族から生まれた正当なる王位継承者。

その存在が故に、その事実が故に、出自しゅつじを現王・バルガスは誰よりも疑っている。

特にソルデイスが生まれた時には、まだ前王のキクルス王も存命だった事実もあり、王子がバルガスと同じ水色の瞳を持っていても彼の父親が誰であるのか疑問を持たない者はいない。

バルガス王は彼が自分の居住する範囲に居るのを嫌い、王宮内でも少し離れた離宮へと幼かった彼を放り込んだ。5歳にもならないうちからソルデイスはそこで王から送られるいろいろな刺客を退けながらずっと生き永らえていた。

勉強にも武術にも才が無いと言われているが、そうではないことに自分もそして刺客を送り続けるバルガスも気付いている。

取り敢えずの救いはソルデイスの二人の兄達がソルデイスの王位継承を望んでおり、彼と普通に接している事だ。

ここにいるクラウドにしても無理矢理『後継者』として名が上がつてしまったサイラスにしてもこの苦勞の多い弟を大切に思っている。

「あ、そーだ、ソルデイス。兄上が戻っているの知ってたか？」

クラウドは少し腰をかがめると自分よりも低い位置にある弟の目に視線を合わせた。

「え？戻ってるの？」

「ぱあつと明るくなる顔に満足そうにクラウドは頷いた。

「ああ、それで今日は特別に子供だけの帰還の宴をやるんだ。お前も来るだろ？」

「うんっ

「シェリルも来るんでしょ？」

「当たり前。俺の部屋でやるから取り敢えず、着替えたらルアンと一緒に来いよ」

即答したソルデイスに彼は苦笑した。首を傾げる弟の背中をパンツと払った後、それにより汚れた手をソルデイスの前にかざす。「前はちゃんと払っていたから気付かれなかったけど。後ろは泥・葉っぱ・草の汁で酷いもんだぞ」

「うわぁ・・・」

よく気付かれなかったものだ、と3人は同時に思った。

「とにかく、このままだと余りにも酷いですよ。さぁ、着替えましょう」

ルアンリルは少年王子にそう促すとソルデイスは観念したように部屋へと歩き始める。

「僕が行く前に始めないでね」

「はいはい」

「はいは一回で十分です」

「はい」

可愛い弟のおねだりと、かつては自分の遊び相手兼養育係としてのルアンリルの注意に吹き出しながら小さく吹き出しながらクラウスは明るい気分で自分の部屋へと戻っていった。

第三話 宴への誘い（後書き）

遅々として進まない。亀の歩みのような話しになってます。
まだクーデターの日にもなりません。

この前書きみたいな話は後2話ほど続きます。

第四話 王子達の宴

手早く着替えたソルデイスは、ルアンリルを伴ってクラウドスの部屋に向かった。

部屋の中にはすでに長兄・サイラスと妹姫のシエルルファーナがソルデイスを待ち詫びていた。

「お帰りなさい、サイラス兄様。ロシキスはいかがでした？」

隣国のロシキス竜王国は先日国王が崩御し、長く王城から出奔していた妾腹の兄王子がその王座についた。

正式な王位継承権を持つ王子ではあるが妾腹だった彼に難色を示していた貴族議会や長老議会も、竜騎士団の強硬なる主張により彼の即位に渋々ながら了承の意を下した。

今回の使者団は、隣国の王への挨拶を兼ねている。

本来なら王位継承者たるソルデイスが出向かなければならなかったが、王の命令によりサイラスが使者にたったのだ。

「ああ、新しい国王は聡明な方だったよ。新しく王女・王子に選ばれた御子殿たちも才気溢れる感じだ」

よほど良い印象の人だったのだろう。サイラスの目が眩しそうにすめられた。

「前の国王様にもお子さまはいらっしゃったのでしょう？その方は王位継承権をお持ちでなかったのですか？」

「レティア姫のことだね」

前王が在位中もなかなか表に出なかった姫君の話題に全員の視線が長兄に集中する。

「彼女も王位継承者だとライアン王は言っていたよ。その事以上にすごいのは彼女があルのロシキスの守り手『ル国竜』の騎士だと言う事だろうね」

サイラスの言葉に全員が目を見開いた。

竜の中の竜とも呼ばれ銀色の巨大な姿態を持つその竜はロシキス

建国の時より国を護っている。

リディアとロシキスが幾度戦をしても最終的にロシキスが滅ぼされなかったのはこの竜の功績が一番大きい。

その竜もかつて建国の際には『竜姫士』と呼ばれる騎乗者がいたらしいが、彼女が亡くなつてからはその背を誰にも許していなかった。

「それじゃあライアン王はの方が王位を継ぐまでのつなぎかよ」
クラウスは齒に衣着せぬ言いようでサイラスに意見する。

「そうでもないみたいだ。レティア姫はライアン王の即位の後、正式に王位継承の辞意を示し、自らはヘンリー王子……つまりライアン王の子供が王を継ぐ時の守護者になると宣言した。竜騎士である以上あの国では自分の将来は好きなように決められる。いくら周りが反対しようとも彼女は自分の未来を自らの望むようにするだろう。」

それにの事がライアン王の差し金ではないかと騒ぎ出したロシキスの諸侯に対し、彼女は壮絶な笑みで『貴様らの息子と結婚させらるのは、嫌だからな、これが一番いい方法だろう？』と言って黙らせてたよ」

ロシキス王女の強硬な姿勢に3人は顔を引きつらせる。

「怖い姫様だな」

何とか言葉を紡いだ次兄の感想に下の二人は大きく頷いた。

だがサイラスは小さく首を振ってみせる。

「いや、綺麗な姫だったよ。」

年はソルデイスと同じ12才、新しく王女になったルミエール姫の方が数日だけ早く生まれたそうだからはライアン王の第二王女と名乗るそうだ」

目の肥えたサイラスが『綺麗』と称するのだから本当に綺麗なのだろう。三人三様に王女の姿を想像してみた。

「さてと、料理の準備も出来たみたいだな。冷めない内に食べようぜ」

話している間に用意された料理は机いっぱいに並んでいた。いつもは言っても出して貰えないような手でつまめるように作られた食事に料理を用意したクラウドス以外の全員が目を見張った。

「こういうのは初めてだな。クラウドスはどこでこういうのを知ってるんだい？」

「まあね、城抜け出して遊びに行った下町とか・・・師匠のところとかいろいろ」

比較的に公務も少なく、城に居るのを厭うクラウドスは公式・非公式・脱走を問わず城の外に行く事が多かった。

顔立ちは父王に似ているのだが、持ち前の気さくで明るい雰囲気^{いまま}の為、未だに王子とはバレていないらしい。

「これ、美味しいね」
「本当に美味しい」

末妹の言葉にソルデイスも楽しそうに笑いながら相づちを打っている。

「まだ下町に行ってるんですか。あれほどやめてくださいと申し上げてるのに」

4人の傍で控えていたルアンリルが聞き捨てならないとクラウドスに注意をするが、彼は「大丈夫、大丈夫」と取り合わない。

「それよりも、ルアンリルもこっちにきて一緒に食べよう」
「そうだ、そんなところに居ずこっちにこいよ」

食事に夢中な下二人とは違い、ゆっくりと優雅に食事をする王子達にルアンリルは逡巡した。

聖長という立場でもやはり王族に仕える身だ。食卓を共にするのは少しばかり気が引ける。

「ほら、ルアンリルの好きな酒も用意・・・」
「馬鹿っ!!!」

クラウドスの失言にサイラスが慌てて弟の口を塞いだ。
「クラウドス、王子？」

途端に鋭くなるルアンリルの眼光に「ジョークだ」と身体で示し

てみるが、その片手に酒瓶があるため説得力などない。

「サイラス王子も、下のお二人が居る所での飲酒はお控え下さいと・・・」

「あ・・・いや、ほら、まあ」

椅子が有るので後ろに引く事もできない状態で二人は怒りの矛先をどう変えようか詮索する。

「お二人には飲ませてないでしょうね」

「もちろんだろ」

「勿論だ」

「ふにゆ？」

「美味しいね」

ルアンリルの問いに肯定する言葉にシェリルの可愛い声と、ソルデイスの声が重なる。

「姫様、王子、ちよつと飲み物を拝借いたしますね」

素早く二人のグラスを取ると匂いを確認する。両方共には間違いなく酒の入っていた形跡があった。

「にゆう、リュウアン・・・クラウド兄様の飲んでるジュウース美味ちいよ？」

「ごめん、ルアン。酒だとは思わなくて僕もシェリルも飲んじやつたんだ」

妹とは違い、もうすぐ13才になる王子は顔色一つ買えずにルアンリルに謝った。

「あなた方の所為ではありませんから、大丈夫ですよ、ソルデイス王子。」

「・・・そして、覚悟は出来てますね？クラウド王子、サイラス王子？」

完璧に起こっているルアンリルに年長者二人は居住まいを正した。その様子を横目でみながらソルデイスはシェリルファーナのグラスに酔い覚まし様に酸味の強い梅のジュースを入れ、自らのコップには先程の内にくすねて置いたクラウド達のお酒を濯ぐのだった。

第四話 王子達の宴（後書き）

案外、飲んべえな12才の王子ソルディスでした。

これで前書きみたいな部分が終わり、やっと次回からクーデター当日に移動し話が進みます。

といってもまだまだクーデターはおきないんですけどね。

第五話 誕生日の出会い

夏が近づく頃、ソルデイスは13才になる。

彼にとつても、彼を支援する者達にとつても待ち遠しい日だ。

その日が無事に過ぎれば、ソルデイスは『リウエル星王』の名が与えられ、補佐役がつきでは有るが国王として立てる。

国王となれば、バルガスもソルデイスに対して刺客は送れない。

そんなことをすれば逆に謀反を企てたとして自分の身が危うくなるからだ。

「とうとう、明日、か」

ソルデイスは自らの住まう離宮の窓から明日の式典の準備に追われている王宮の人々を見ていた。

いつもなら勉強を見てくれるルアンリルも今日は朝から明日の準備の為に奔走している。

空いた時間をどう過ごすべきかと考えたソルデイスは小さな冒険での出会いから親しくなったアーシアの元に遊びに行こうと決めた。それならばと、椅子を降りると手短にあつた菓子を手に取り、もう少し動きやすい服に着替えようとクローゼットへと向かう。

「失礼いたします。王子、陛下が謁見の間にてお呼びです」

いそいそと服を選んでいたソルデイスの耳に女官の固い声が入る。「父上が？」

珍しいこともあるものだ、とソルデイスは内心思いながらいつもの通りの笑顔で「すぐに行きます」と答えた。

服装はこのままでいいのだろうかと女官に視線で問いかけてみるが、彼女は鉄面皮のように無表情のまますぐに去ってしまう。

ソルデイスは選んだ服と、菓子を棚の中に隠すと、さつさと用事を済ませるために滅多に訪れない本宮へと向かった。

謁見の間は本宮でも中央に位置する場所にある。

国王の権勢を示すための場所でもあるそこには選り抜かれた調度品と歴代の王の肖像が所狭しと飾られていた。

もちろん、現王バルガスの肖像も王の玉座の後ろにでかでか飾られている。

「父上、ただいま参りました」

ソルデイスは言葉と共に頭を下げると玉座に我が物顔で座るバルガスを見る。

「ソルデイス、なんじゃ、そのみすばらしい格好は・・・客人に失礼であるぞ」

豪華な飾りのついた服をひけらかしながら、バルガスは普段着のままの息子を窘めた。

「申し訳ありません。早くに、ということでしたので・・・」

「聞き苦しい言い訳じゃな。明日の式典を考えれば各国からの使者が謁見に来ていることは分かり切っておろう。」

そなたに比べサイラスはきちんとした格好ですでに幾人かの使者と挨拶を交わしておるぞ」

笑顔を崩さずに答えるソルデイスの言葉を切ってバルガスは更に言葉を投げつける。

各国の使者からの挨拶もバルガスが勝手にソルデイスを排し、サイラスに対応させていたのにそれすらもすべてソルデイスの失態となっていた。

「そうですか。兄上には後で謝っておきます、それよりもご用件は教えてください」

まだまだ罵りを続けようとしているバルガスは、ソルデイスの素っ気無い言葉に不意をつかれ機嫌悪そうにソルデイスの後ろを指さした。

「そなたにロシキスよりの使者じゃ。失礼のないように挨拶をしな

さい」

そこで初めてソルデイスは王宮の中でこちらを伺っている少年少女達に気付いた。

3人ともロシキスの王族の証とも言える白金の髪をしている。

右に居るのは花が綻ぶように美しい姫君。優しい青緑色の瞳は春の若葉を思い浮かべさせる。

左に居るのは冬の厳しさを示すような藍色の瞳を持つ姫君。すつきりとした立ち姿が彼女が武術の達人である事を示していた。

そして二人の間で大きな空色の瞳で見上げている王子。まだ8才ぐらいにしか思えないほど幼い彼はキラキラとした瞳をしていた。

困ったようにこちらに視線を投げかけてくる彼らにソルデイスは居住まいを正すと挨拶をした。

「初めまして、リディア王国第三王子・ソルデイスです。」

ロシキスの王子、王女方には私のために遠い所より来て頂き、誠に感謝しております」

丁寧な挨拶にまずは右にいた少女が歩みを進めた。彼女は可憐な仕草で頭を下げた後につこりと微笑んだ。

「お初にお目にかかります。ロシキス第一王女ルミエールです。まだ王女となって日の浅い私たちにも丁寧なご挨拶ありがとうございます」

それに続き、左にいた少女が歩みを進める。彼女はドレスを着て折らず、ロシキスの竜騎士団用の軍服を着ていた。

「ロシキス第二王女・レティアです。本日は竜騎士として姉君と弟の護衛としてやってまいりました。宜しく願います」

最後に姉たちに促されるように少年が歩み出た。自分と似て非なる水色の瞳をじいっと見つめてから、慌てて頭を下げた。

「ロシキス第一王子のヘンリー・アルバルトです。ソルデイス王子においては生誕の議を迎えられ誠にお喜び申します。またバルガス王にお願した事を受け入れてくださいますよう、ソルデイス王子にも重ねてお願いするように父から言われています」

憶えたばかりの長い台詞を間違えずにいえて、彼は安堵の息を吐いた。どうやら相当緊張しているらしい。

それもそうだろう。まだ数ヶ月前に王子となった彼に取り、今回が初めての公式的な外交の場となるのだ。

ソルデイスはそんな王子の緊張を解すように少し腰をかがめ、王子に視線を合わせて訊ねた。

「ライアン王よりのお願ひ事ですか？」

「はい。ルミエール姉さまをソルデイス王子のお嫁さんにして欲しいそうです」

優しいその仕草にヘンリーは姉と同じように明るく笑うと爆弾発言をした。

「それは嬉しい限りです。このように美しい姫が私の結婚相手として来てくださるなら、これ以上の僥倖（あやうし）はないでしょう」

ソルデイスは当たり前障りのない言葉で答えるとルミエールに向かい笑いかける。ルミエールも弟の発言に申し訳なさそうに微笑んで返した。

しかしバルガス王はソルデイスの発言の真意を取らず、息を荒げて反発する。

「王妃等のまだ決まった訳ではないぞ、ソルデイス。国内、国外、全ての王族・貴族が時代の王の后になろうと躍起になっておる。ルミエール姫は最有力候補かもしれぬが勝手にそなたが返答すべきことではない」

和やかに過ぎようとしていた場面に発せられた言葉にルミエールは少し顔を蒼くさせ、ヘンリーはきよときよと状況を読めずに回りに助けを求めて・・・レティアはわずかに眉を顰めた。

だがソルデイスに取りそれは慣れた事で、彼はそれを受け流して深々と父に頭を下げる。

「はい、わかっています。父上」

「それでは、もう下がってよい。そなたの態度ではまだまだ外交など無理なようじゃ」

追い払うような態度にルミエールが顔を上げて反論しようとした。

「そのような事は・・・」

「そうですね、それでは失礼いたします」

しかしその言葉はソルデイスにより、庇うように遮られてしまう。

「どうして」と問いかけるルミエールの瞳に彼は悲しそうな笑みで答えてからその場を辞した。

「さあ、ルミエール姫、ヘンリー王子、レティア姫。我が王子、サイラスに城を案内させましょう」

視線をソルデイスの背中に向けている隣国の王子と王女にバルガスは今度は自分が認めた跡取りであるサイラスを紹介しようとした。

しかしその申し出の前に、レティアはすつと後ろに下がる。

「姉上、ヘンリー、すみませんが、私はまだソルデイス王子に言う事がありますのでサイラス王子に城を案内して貰うのはお二人で行ってください」

レティアにしてみれば義父ライアンの言葉はすべてソルデイスに伝わっているとは思えなかった。それにルミエール達とは違い、彼女は自分の父親がロシキスの治世を引いていた時代にサイラス王子により城は案内されている。

反論しそうになるバルガスを後目に彼女は儀礼的に頭を下げると「バルガス王、それでは御前を失礼いたします」

と、一言だけ残してソルデイスの後を追っていった。

第五話 誕生日の出会い（後書き）

ロシキスの3兄弟がやっと登場しました。
後もう少いでクーデターが始まります。

第六話 親友からの忠告

謁見の間か出たソルデイスは足早に自分の離宮に戻ろうとした。

「これはソルデイス殿下、ご機嫌麗しゅう」

ソルデイスの行く手を遮るように響いた声にソルデイスは足を止め、そちらを振り返る。

そこに居たのは黒髪に薄い緑色の瞳をした青年だった。彼は真っ黒な精霊族の民族衣装を身に纏い、優雅な足取りで幼き王子の側まで来た。

「ダイナラーデ卿、見えられていたのですか。あなたはなかなか登城されないと思っておりました」

かつて王位継承者の立場を棄て聖長と駆け落ちしたアルガス王子の遺児、あの光姫アーシアの兄でもあるウィルフレッド・ダイナラーデはその出生故にバルガスに厭まれており、王宮に顔を出す事は少なかった。

「さすがに私でも次代の国王の誕生を祝う祝典を辞するわけにはいきませんよ」

「そうですね、それは嬉しい限りです」

儀礼的な挨拶を交わし、双方共にその場を去ろうとした時、遠くから声がした。

「ソルデイス王子！」

バルガス王の元を離れ、やっとの思いでソルデイスに追いついてきたレティアだった。

ウィルフレッドは彼女の登場に少し目を見張ったが、すぐに張り付いたように笑みを浮かべると自分の目の前にいる王子に、彼女の説明を自分にするように求める。

「ロシキス王女のレティア姫です。姫、こちらは私の従兄弟に当たるダイナラーデ卿」

「ウィルフレッド・ダイナラーデと申します。お初にお目にかかり

まず、竜の国の姫君」

紹介されると同時にウィルフレッドはレティアの手を取り、その甲に挨拶をする。

「あ・・・はい、お初にお目にかかります、ディナラーデ卿」

ソルデイスの端的な紹介と、それとは真逆なウィルフレッドの挨拶にレティアは少し戸惑いの表情をしたが、長年、ただ一人の王位継承者として育てられた彼女はすぐに表情を引き締めて挨拶を返した。

レティアの挨拶を受け、再度、静かに笑った彼はすぐに立ち上がる。

「それでは、私も従姉妹殿を手伝わねばならぬのでこの辺りで・・・

」
「ルアンは神殿の方にいると思います。宜しくお願いします」

短い挨拶の後、今度は颯爽とウィルフレッドは去っていった。

その後ろ姿は、格好だけなら魔術師そのものだが、どこか鍛錬された武術者としての動きが垣間見える。そんな彼の後ろ姿を見送ってから、彼はレティアに向き直った。

「・・・それで、王女、何かご用ですか？」

先程よりも艶やかで、無邪気な笑顔にレティアは目元を鋭くする。

「お前は、いつもあんな態度なのか？それに、お前にはいつもあんな態度なのか？」

怒気をはらんだ彼女の言葉にソルデイスは更に小さく笑う。

「あんまり、解りにくくて、判りやすい質問しないでくれるかな」
だがその言葉にはいつもの無邪気さも、明るさのかけらもなかった。

ソルデイスの唐突な変貌にレティアは少し息を吐くと、先程まで自分がいた謁見の間に視線を向ける。

二人は実は大分前からの知り合いだった。

ロシキスとの国境の町によく『静養』という名目で王都から遠ざけられていたソルデイスは、遊びに出ていた近くの村で王城から抜

け出して来ていたレティアと出会った。

最初は自分と同じぐらいに剣が使える、教養もあるソルデイスをレティアは疎んでいたが、村はずれに位置する森で彼が彼の剣術と学問の師匠とともに刺客に襲われているのを見つけてから状況が変わった。

互いに互いを異性として意識する事がない彼らは男女の枠を越えた形で『親友』となっていた。

「それにしても噂異常に酷いな・・・」

他国の使者たち・・・それも隣国の王族が居る前でのあからさまな叱責など本来ならばあつてはならないことだ。

「いや、今日はお前やルミエール姫達がいたからましな方だったぞ」
ソルデイスは小さく呟くと他人に見せる明るい笑顔でレティアに答える。

「お前、その笑顔、気持ち悪い」

「悪かったな」

ソルデイス自慢の笑顔にレティアは不機嫌な顔で答える。

「目が、笑ってないからな。気色悪い事この上ない」

悲しい時、起こった時、辛い時、全ての時に笑う事を自らに強制してきたソルデイスのそのクセをレティアはこの上なく嫌っていた。特にこの城の中に居る時のソルデイスはこれ以上にないくらい『無表情な笑顔』で過ごしている。

自分の知っている彼は怒ったり、泣いたり、喚いたり、そして普通に笑ったりともつと表情が豊かだった。

「それでも、笑わなければいけないから・・・」

「そうか」

静かに告げられるソルデイスの言葉に、レティアはそれ以上の繰り言をやめた。

「それでは、最後に忠告だ・・・義父が呟いていたのを盗み聞きしたのだが、今日・明日バルガス王の動向に気を付ける。

もしこの二日間に何事かを仕掛けられ、お前が王位継承に相応し

くない物だと示されたら、リディアはさらに5年、バルガスの治世に苦しめられる」

リディアの法律では王位を継げるのは13才だが、神殿などに相応しくないと判断されればその後見人が王国の執権となり国営を執り行う事となっている。

更にその期間中に王位継承者が生まれれば、新しく生まれた赤ん坊に王位継承権は移る。

「わかってる・・・そしてその5年の間、俺は女を宛われて望み通りの子供が出来たら殺される・・・だろ？」

だからこそ、バルガスはソルデイスに一度たりとも縁談を持つてこなかった。下手にどこかの国の姫や有力貴族の娘と婚約させるとそちらに後見人の権利が移ることがあるからだ。

「義姉上がお前の婚約者になれば、義父どのが後見人となれるのだから」

「それはどうかかな、もつと弱小な国ならまだしも、リディアに次ぐ国の国王に国営を取られるのはさすがに貴族達が嫌がるだろ」

肩をすくめて答えたソルデイスは、近づいてくる女官達の気配に、話はこれまでだとリディアに背を向けた。

「とくかく私は、義姉上がソルデイス殿下に嫁がれる日が来る事を本気で願っています」

今までの会話が悟られぬようにリディアは声高にそれだけを述べると、踵を返して謁見室の方へと戻っていった。

ソルデイスは普段は見せないような力の抜けたありのままの笑顔で、親友の後ろ姿を見送ったのだった。

第六話 親友からの忠告（後書き）

ソルデイスがやっと本性をかいま見せました。
やはり普通にしている方がソルデイスはかきやすいです。

第七話 精霊の守護符

自室に戻ったソルデイスは手早く着替えると当初の予定通りに奥宮へと向かった。少しばかり予定がずれてはいるが、奥宮に行つて戻つてくる時間は十分にある。

潜り慣れた壁の穴から中に入ると、待ち構えていたアーシアが建物に入り口から明るい笑顔で出迎えてくれた。

彼女の顔はいつもより艶やかで、何か幸せに満ちている感じがした。

「何かあつたの、アーシア？」

ここ暫くで呼ぶようになった彼女の愛称に、彼女は零れるような笑顔を向けてくる。

「実は、昨日、恋人が逢いに来てくれたのです」

恋人　　バルガスの脅迫によりこんな場所で愛人のように捕らわれているとはいえ、彼女の心は常に彼の元にあつた。

その存在が知られれば、彼が殺されると思い、彼女はずっとそれを黙っていた。

ソルデイスにも黙っていたのは彼がこれ以上気に病むような思いをしないようにとの配慮だった。

「どうやって？」

恋人ぐらいいいたのだらうと踏んでいたソルデイスはその部分に触れずに、彼女の恋人がどうやって会いに来たのかを知りたがつた。

「ソルデイス様の使っている穴から入ってきたのだと言っていました」

「そういえば、少し穴が広がってたから、今日は楽に通れた。」
いつもなら、少し苦労する肩口の部分が今日はいとも簡単に抜けられた。また、回りの煉瓦が緩くなっていた気もする。

「『彼』から聞きました。ソルデイス殿下は明日が誕生日だそうですね。当日はいえないでしょうから心からのお祝いを先に述べさせ

ていただきます」

ソルデイスが王権を手中に収めるのは誕生日の翌日から……
そうなるかと明後日には新王の誕生となる。

だが、それが厳しい事をソルデイスは理解していた。

レティアからの忠告からだけでは足りない。それ以前にバルガスはソルデイスが王位を継ぐに相応しくないと回りに印象付けるようにしていた。

身に覚えのない罪状での審問が来るたびにソルデイスは辟易としながらも、すべてがえん罪である事を証明してきた。

それがソルデイスの才知を示す事になることを知ると今度は食事に毒を盛ってきた。それも死に至るようなものではなく、じわじわと神経を冒すような毒ばかりを選んでいる辺り、バルガスの心の闇の現れといえよう。

一度、どうしても逃げられないような立場で毒を飲まされそうになったことがあった。

その時は、機転を利かせたルアンリルがその毒を煽った事により事なきを得た。精霊族にはあまり利かない毒とはいえ、ルアンリルの苦しみようは尋常ではなかった。それでも自分を慰めようとするとルアンリルの姿勢にソルデイスは深い怒りと悲しみを憶えた。

「もし、本当に、もし明後日、僕が王位を継げたなら、絶対、アーシャをここから出してあげる」

そして、引き離された恋人の元へと彼女を届ける。

バルガスに苦しめられた人間を一人でも多く救い出し、解放する事だけが自分の出来る贖罪だ。

「それでは、私は、あなたに忠誠を誓う魔術師になりますわ」

アーシアは躊躇いもなくソルデイスに宣言すると自分よりも幾分背の低い王子の前に跪いた。

「私が本当に『光姫』と呼ばれる者で、王を選ぶ事ができるのなら、

私はあなたを終生の王として認め、あなたに永久の忠誠を誓います」
彼女はそう言うと自らの掌に光を集めて、王子の掌の上に乗せた。
それはすうっと彼の身体の中に入り、解け込む。

「今のは、何？」

「私の義父が教えてくれた精霊族に伝わる忠誠と守護符の儀式ですわ」

自分が主として認めた者にだけ、自分の理力のかけらを捧げる儀式。主が窮地に陥った時に、その理力のかけらが主を護るための盾になる。

彼女はソルデイスの中に悲しい何かを感じ取って、その儀式を行ったのだ。

「あなたに、光のご加護がありますように・・・」

「ありがとう、アーシャ」

自分を純粹に心配してくれる彼女にソルデイスは儂い笑顔を浮かべた。

「それから、これは誕生祝いです」

アーシアは自分の宝石箱の一番奥に隠していた小さなネックレスを取り出した。

「光のダイヤ。闇のオニキス。水のアクアマリン。炎のルビー。風のサファイア。大地のアンバー。そして森のエメラルド。すべての精霊の貴石を嵌めた護符です」

六芒星のそれぞれの三角の部分に森以外の全ての貴石が入り、六角形の部分の真ん中に全ての中心たる森の貴石がはめ込まれたそれは優しいオーラに包まれている。

「大事なものじゃないの？」

一つ一つ選び抜かれた石に、高度な魔法が組み込まれているそれはどうみても彼女専用で作られたものに見えた。

そして宝石箱の奥の奥に隠すように置いていたということは、バルガスに見つかってはいけないものだということだ。

それはつまり、この護符が恋人から彼女に送られた事を示してい

るのではないだろうか。

「実は同じものを二つ持っているのです」

アーシアはもう一つの手から同じデザインのネックレスを出した。「あの人は昔から、未来が見えてるみたいにいるとくれたのです。この護符も、この間来た時に、『アーシアが主と思う人に渡したらいい』と言って置いていったんです」

だから持っていて欲しいと、アーシアはソルデイスに訴える。

ソルデイスは暫くその護符を見つめてから、そっとそれを握りしめた。

「ありがとう、アーシア。どんなプレゼントよりも嬉しいよ」

優しい温もりが感じられるそれには、各国の国主が送ってくる形ばかり豪華な贈り物よりも数倍の価値があった。

ソルデイスはそれを失くさないように上着の内ポケットの中に入れると、その存在を確かめるようにそっと叩いてみる。

微かにしやらりと鎖がこすれる音が、耳に心地よかった。

「それじゃ、またね、アーシア」

ソルデイスの反応に嬉しそうな顔でこちらを見ていたアーシアに短い挨拶をすると、ソルデイスは時間を急ぐように椅子から立った。「はい、またいらしてくださいね」

アーシアはそういうとソルデイスを見送る。

すぐに植木の向こうに隠れてしまった後ろ姿に、少しの寂しさを憶えながらソルデイスの別れの言葉を反復する。

「それじゃ、また・・・？」

いつもなら、『また、くるね』と言ってくれるはずなのに、まるでわざとその言葉を外したように今日は言わなかった。

「王子・・・？」

どこか自分の恋人と似ている部分を持つ年若い王子の残した言葉に一抹の不安を覚えながら、アーシアは夕闇迫る空を見上げた。

第七話 精霊の守護符（後書き）

ソルデイス、一日早くアーシャ姫に誕生日プレゼントを貰うの巻でした。

精神的に幼いフリをしているソルデイスをかくのは存外難しいです。

第八話 誕生前夜の宴

夕闇が辺りを包む頃、ソルデイスの誕生を祝う宴は盛大に始まった。

誕生日の前日の夜から国内外の有力な貴族・王族がリディアの王城を訪れ、王室主催のパーティに参加する。

誕生日当日の朝からは豪商や豪農などの貴族階級ではないが裕福な人たちが貢ぎ物を持って現れ、昼頃には国民の前に顔を出して王子のお披露目となる。

そして誕生日の翌日には戴冠式・・・正式にソルデイスが王位を継ぐという流れがすでに決まっていた。

ソルデイスは王の横の椅子に座りながら、父王や自分に挨拶する貴族達の顔を見ていた。

王の横には王妃・・・ソルデイス達の母・ソフィアが悠然と座っている。そしてさらに向こうにはサイラスが、ソルデイスが座っている者よりも立派な椅子に居心地悪そうに座っていた。

その様子を見て、大体の貴族達は訝しげな顔をしたが、できるだけ表情に出さず、バルガスの恠気に触れないように心がけながら世辞を言つてゆく。ひどい者はバルガスにのみ祝辞を述べ、ソルデイスには礼だけで済ませている。

「ソルデイス殿下、ご生誕の儀、誠におめでとうございます」

そんな中、ディナラーデ卿ウィルフレッドはきちんと儀礼に乗っ取り、ソルデイスに先に挨拶をした。

バルガスが嫌そうな顔をするが、大勢の前で王族でも自分と同じぐらいの位置を持つ彼を叱責することは出来ず齒がみしている。

「ありがとうございます、ディナラーデ卿。宴の準備などもありがとうございました。後はごゆるりとくつろいでください」

ソルデイスは彼の挨拶に笑顔で返し、深々と下げた頭にねぎらいの言葉をかけた。

ウィルフレッドは更に深く頭を下げた後、バルガスへの挨拶もなくテラスの方へと消えていった。

「まったく、ダイナラーデ卿にも困った者よ……我が甥とは言え、さすがに15才になるまで田舎で、下々の者と暮らしていた所為でどうも都での立ち居振る舞いというものが理解できておらん」

不満そうに述べるバルガスにソルデイスは一つ息を吐くと

「父上、そのような言葉を述べると、どちらが王族として相応しくないかおのおの方に見せつける様なものですよ」と完璧な笑顔で述べる。

かあつと顔を赤らめるバルガスを見ないようにしながら、ソルデイスは椅子から立ち上がる。

「ロシキスの方たちを放っておくのもまずいですよね。僕は今から王子達の相手をしてきます。後はよろしくお願いしますね、父上」

誰をも従わせる水色の眼光、それを縁取る光り輝く黄金……
竜国の薔薇』とまで謳われた母親譲りの美しい顔立ちで完璧な笑顔を作ったソルデイスは止める暇も与えずにその場を去った。

始めてみせる後継者として相応しいソルデイスの態度に有力貴族の中から感嘆の溜息が零れた。

「ま……まったく、あれも自分の生誕の儀だと判っているのか。王子が謁見しないなど何事だと……」

いつものように文句を言っではみるものの、それは余りにも滑稽すぎてバルガスは去っていく息子の姿を憤怒の瞳で睨み付けたのだった。

第八話 誕生日前夜の宴（後書き）

徐々に話が進み始めました。

第九話 嵐の前の静けさ

玉座から離れたソルデイスは先程見つけたルミエール達に向かって近づいていった。

「ソルデイス王子、おめでとうございます」

「本当におめでとうございます」

通り過ぎるたびにかけられる祝いの言葉に適当に笑顔で答えながら、目的の人物へと声をかける。

「ヘンリー王子、ルミエール姫、レティア姫」

ソルデイスの声に一つのテラスを借り切っていた3人は笑顔で応えた。

「ソルデイス王子、ご挨拶はお済みになりましたの？」

ルミエールの言葉に、まさか途中でうち切ってきたとは言えず、取り敢えず、笑顔でごまかした。

それを察知した3人は先程まで彼がいたパーティー会場の中央に位置する玉座へと顔を向ける。そこにはソルデイスがいなくなって更に羽目を外した、バルガスが下品な笑いを浮かべながら隣国の使者に何かを言っていた。

サイラスは少し非難めいた視線を向けているが、王はそれにも気付いていないようだった。

こんな状態であるここに帰れとは言えない3人をソルデイスは中庭へと誘う。

少し喧騒から離れたそこには小さな噴水があり、休憩にちょうどいいベンチがいくつか置かれていた。

「ソルデイス殿下、改めておめでとうございます」

声を合わせて祝いの言葉を言ってくれた3人に、ソルデイスは目を細める。

眩しく温かい光のような彼らの態度は、ソルデイスの心をも明るく照らしてくれる。

「ありがとうございます」
ソルデイスは3人の手を取ると心の底から感謝の意を述べた。

ルアンリルは広い会場の中をソルデイスを探しながら歩いていた。テラスにはいろいろな有力貴族や、隣国の大使がおり彼らはそんな彼女を不思議そうな顔でのぞき見ている。

「どこに、行かれたのだろう」

先程自分の従兄であるウィルフレッドの挨拶の後、ソルデイス王子が玉座から離れるのを確認した。

自分が治める精霊族の副族長の件で最高神官長との話の最中でなければ彼の後をすぐに追いかけていたのだが、わずか数分の間に王子は別の場所へと移動したらしい。

（相談したい事があったのだが・・・）

バルガス王から自分宛に奇妙な伝言が届いていた。

それについて何かしらの相談と忠告をしたかったのだが・・・時は、刻々と過ぎ、伝言された時刻までに時間はない。

「ルフィーナ？」

「従兄上？」

珍しい愛称で呼ばれて、彼女は顔をあげた。

そこには温厚な従兄のウィルフレッドの顔があった。王族独特の整った顔立ちに闇を映す黒い髪と新緑の輝きの薄い緑色の瞳

学業は勿論、魔術にも剣術にも秀でる自分の従兄。精霊族と王族のハーフでなければ・・・いや、王位継承の証である『光なす黄金』をもっていたなら彼はソルデイスよりも先に王になっていたはずだった。

だが彼はそんな事をおくびにも出さずに、いろんな貴族とつきあっている。

バルガスが彼を嫌うのは『王位継承を持たない』という同じ立場

でありながら、自分と彼との間にある信頼の差のせいだろう。

「ソルデイス王子を知りませんか？」

ルアンリルの問いに、彼は玉座の方を見た。

王子がいないのを確認すると、少し考えたようにしてから

「それでは、先程中庭で見かけられたのは、王子だったか・・・口シキスの王子たちと一緒にいたように思う」

ウィルフレッドの言葉に、ルアンリルはぱあっと顔を明るくさせた。

「ありがとうございます。従兄上」

挨拶もそこそこに去っていく従弟妹にウィルフレッドは、小さく苦笑する。

「その心が今日が終わるまで持つかな・・・？」

小さな小さな呟きは、パーティのざわめきの中、誰にも聞き取られる事はなかった。

第九話 嵐の前の静けさ（後書き）

色々登場人物達が裏で画策しています。

ちよつと王都脱出編の半分ぐらいが終わったと思います。

第十話 動乱への序曲

中庭に出たソルデイス達は会話を楽しんでいた。

まだ成り立ての王子・王女は鄙^{ひな}びたところなど微塵もなく、頭の回転も速い。

もちろん生まれてからずっと王女をやってきたレティアに至っては、学者が舌を撒くほど竜に対しての知識が広がった。

ソルデイスも昔から自分の裏の顔をよく知っているレティアがいるせいか、いつも王宮では見せてない聡明さを出して会話を盛り上げていた。

「一手、やらないか？」

そんな話しになったのはヘンリーの武術の話からだった。

よい手合わせを多く見た方がいいという意見に、レティアが言い出したのだ。

「いいよ、やるう」

ソルデイスも快く答えると、自分の剣帯にあった愛用の剣を抜く。レティアも同様に抜くと自分の兄弟達に少し下がっているように指示をした。

二人が向き合い、礼をする。暫くの間の後、静かな中庭に剣戟が響き始めた。

ルアンリルはソルデイスを求めて王宮の中を歩いていた。

中庭に続く通路にはそれほど人はおらず、ルアンリルは誰もみない場所では少し小走り気味に足を進めた。

「ルアン！」

「クラウドス王子」

急いでいるルアンリルの姿を見つけたクラウドスが不思議そうに、

声を掛けてきた。

(拙いな・・・)

伝言の内容はあまり、彼には聞かれたくない内容だ。下手をすれば変な誤解を生まないと限らない。

だからこそ先にソルデイス王子を探していたのだが・・・この際、クラウド王子にもソルデイス王子との相談を聞いて貰うしかないだろう。

「どうした？」

「ソルデイス王子を探しているのです。従兄殿が中庭で見かけたといっていたので」

問いかけてくるクラウドの腕を掴んで、ルアンリルは歩きながら説明をした。

バランスを崩しながらもルアンリルに従った彼は、即座に体制を立て直すとルアンリルの足に遅れないように歩き始めた。

中庭にはあまり人がいなかった。

ルアンリルは茂みの一つ一つとを注視しながら、前にソルデイスが一人でくつろいでいたことのある中庭の奥へと歩みを進める。

「あれ？剣戟じゃないか？」

人が途切れた頃に、クラウドがぼつりと呟いた。

先程まで気付かなかったが、確かに規則正しく剣が逢わされる音がする。

誰かがこの薄闇の中で剣の練習をしているようだ。

「こつという中でやるなんて珍しいな」

剣の手合わせをするなら日中が基本だ。確かに戦になれば闇の中でも震わなければ行けないが、練習でそういう事をやることはまずない。よっぱどの手練れでないと、互いに傷をつける可能性があるからだ。

ルアンリルとクラウドスは顔を見合わせると、できるだけ気配を消して剣戟のする方へと近寄った。

「……!?」

戦っている二人の姿を見て、彼らは息を飲んだ。

一人は女性剣士として名を馳せてきているレティア王女。彼女の太刀筋は舞っているのように美しく、繰り出される切っ先から紙一重で身体をひらめかせている。

そしてもう一人は、ソルデイス王子

日頃より、武術の鍛

錬には顔を出さず、武術の教師達にわずかの差のみで勝っているはずの彼は、美しさの中に力強さのある太刀筋でレティア王女に攻撃を仕掛けていた。

勿論、避ける姿も見事でまるで二人でダンスを踊っているようにも見える。息が合っていないけれどもできない予定調和の上での見事な剣舞だ。

あまりの事に呆然としすぎ、ルアンリルの手が近くの小枝に触れた。

カサリ……

わずかに零れた音に剣を合わせていた二人が同時に振り向く。

「あ……」

「なんだ、ルアンリルか」

ソルデイスはそういうと剣を剣帯に戻した。どうやら手合いはこれで終わりらしい。

レティアもそれに倣い、自分の剣を鞘に納めたのだった。

第十話 動乱への序曲（後書き）

ルアンリルとクラウドが初めてソルデイスの剣の腕前を見ました。徐々にすべてが動き出す中で、もうすぐ動乱が起こります。

第十一話 破られた静寂

「どうしたの、ルアン」

先程の手合いが嘘のように一つも息を乱していないソルデイスがルアンリルに問いかけた。

そこでやっと当初の目的を思い出したルアンリルではあったが、どう説明するべきか言い倦ねてしまう。

「とうとう父上が何か仕掛けてきたの？」

ソルデイスの問いに、ルアンリルの肩が揺れた。

「最高神官長に呼び出しを受けました」

現在、神官職の最高位についているのはバルガスの息の掛かったバンテランドという者だ。

聖司族の最高種族・精霊族の族長という立場を使い、できるだけ王と二人きりでの接触を断っていたルアンリルだったが、神殿の呼び出したと逆らう事はできない。無碍にすれば一族と神殿との争いにまで発展する可能性があるからだ。

呼び出されたのは王宮の一角にある離宮だった。アシアの閉じこめられているものと同じ作りのそこに、ルアンリルを呼び出したと言ふ事はその先にあるべき事態も次第に知れる。

「そう・・・」

わざわざ断れない相手の呼び出しにすると、随分姑息な手段ではあるが確実な手段だ。

相手の聖職位が最高神官長とあるだけに、まだ王位を持っていないソルデイスの命令では阻止する事ができない。

(それに・・・)

ソルデイスは今日の朝、自分の元に届けられた父王からの伝言を思い出した。

最初は何をやるのだろうと思ったが、ルアンリルの呼び出し等で、何をしたかったのか段々と見えてきた気がした。

(どうする、べきか・・・)
手を間違えてはいけない
くなる。

間違えれば、護れる者も護れな

それはソルデイスが一番、身にしみて知っていることだ。

真剣に考え込んでいるソルデイスの様子にルミエールとヘンリー、
そしてクラウドが不思議そうな顔でこちらをみていた。

レティアは3人の後ろで怒りをたたえた瞳でこちらを見ている。

どうしようかと、心の中にある考えを形にしようとしても、発す
る言葉が見つからない。喘ぐように口を開けた時、不意に後ろから
声がかかった。

「ソルデイス・・・こんな所にいたのか」

「お兄様たち、見つけた」

現れたのは、サイラスとシエリルファーナだった。

彼らは自分たちに寵愛をかけるバルガスの側から取り敢えず逃亡
し、先に宴の席を外していたクラウドとソルデイスを探していたの
だ。

「兄上、シエリル・・・」

クラウドは突然現れた二人にも現状を説明しようとした。しかし、
その腕を笑顔のソルデイスが止める。

「待って、兄様・・・」

「あのな、ソル・・・」

ダ
ン・・・ッ

クラウドが何か言葉を発しようとした瞬間、遠くで破壊するよう
な音が聞こえた。

中庭からは見えないが、城のいくつかの場所で一斉に火の手が上
がったようだ。

微かに聞こえる悲鳴、声、悲鳴・・・剣戟・・・何かが起きよう
としていた。

「何が、起きたんだ？」

あまりの急なことに呆然としながら、サイラスは呟いた。クラウドはそんな兄の手を急いで掴むと近くの茂みに身を隠した。茂みの中では、怯えるシェリルファーナをルアンリルが庇うように抱きしめている。

違う茂みではレティアが声を上げそうになるヘンリーの口を手で塞ぎ、ソルデイスがルミエールの頭を抱き「大丈夫だから」と言い聞かせていた。

「王子、王子はどこだ!？」

鎧を着た誰かが、喚きながらこちらへと近づいてきた。その手には、すでに幾人か傷つけたのか血まみれの刃が握られている。

「王子を捕まえた奴は特別報酬だぞっ！」

違う声が荒々しく響く。ルミエールが上げそうになる悲鳴を、ソルデイスは拘束する手を強くすることで押さえた。

クラウドとサイラスは自らの腰の剣を抜くと、タイミングをあわせて茂みから飛び出る。

「や……あが？」

二人の刃は歓声を上げる前に二人の兵士の喉を掻き切った。噴出した紅い鮮血が二人の豪華な衣装を汚す。

ソルデイスも、ルミエールを抱えながら右手で剣を抜くと、それを左手へと持ち替えた。

「隠れてて……大丈夫、護るから」

「姉上を護れるな？」

ソルデイスの言葉にルミエールは真剣に頷き、ヘンリーはレティアの言葉を護るようにルミエールの身体を抱きしめた。

二人は息を合わす出もなく、茂みを飛び出すと違う出口から出てきた傭兵と思しき人物達の喉を切り裂いた。

先程見せた剣舞よりももっと鮮やかな手口で、彼らは襲い来る敵を切り伏せていく。

ルアンリルはロシキスの王女たちの元へと行くと、シェリルファ

「ナを彼女達と同じ茂みに隠し、儀礼用として持ってきていた霊剣を抜いた。」

ルアンリルは4人みたいに打っては出ず、戦う術を持たない王子王女を護る事に専念した。

「王子、王女・・・ご無事ですか!？」

違う茂みを縫って出てきた人物が、戦う彼らの姿を見て、安堵の息を吐いた。

彼は応戦しているソルデイスとレティアの前にと鮮やかな太刀で全ての敵をなぎ払う。そして返す足で年長の王子達に加勢しようとした。

しかしすでにその時、クラウドは最後の敵にとどめを刺した所だった。

「さすがに強いですね・・・クラウド王子」

男はそついうと剣に付いた血を払い、鞘へと納めた。

第十一話 破られた静寂（後書き）

クーデターが始まりました。

剣と魔法の世界なので、ダーンという音の元は魔法です。

大砲をだそうかと思ったのですが、それはどうも世界に逢わないのでやめました。

第十二話 生きるための約束

突然現れた男に倣い剣を仕舞った彼らは傳つたく彼の前に立った。

「いったい、何が起きた？」

状況が全く判らない状態でいきなりの戦闘に入ったサイラスはとりあえず、情報を求めた。

男は顔をあげると王子達の顔を一つ一つみた。

「デйнаラーデ卿ウィルフレッド殿が反乱を起こしました」

その言葉に、誰もが耳を疑った。

バルガスには決して従順ではないにしろ、聖司族として王族として儀礼に厚くソルデイスの王位継承に肯定的だった彼がこの時期に反乱を起こすなど誰も予想していなかった。

特に従兄である彼を兄のように慕っていたルアンリルには想像ができないことだ。

「何故、今頃・・・」

反乱を起こすならもつと前に起こすべきなのだ。

ルアンリルだって彼が従いたくて王家に従っているのではない事ぐらい知っていた。

妹を、母側の一族を、そしてルアンリル自身の立場を人質に取られ、従属する気持ちで彼は王に従っていた。

彼の父親はバルガスの兄・・・王位継承権を持っていたアルガス王子だ。本来ならば、『王位継承権を持っていた者の息子』としてソルデイス達と同じ『王子』の立場であるはずだった。

だが彼はその権利も一切与えられず、ただただ苦しく辛い立場に甘んじていたのだ。

せめて光姫であるアーシアが攫われた時ならば、彼のこの反乱はまだ納得できた。

しかしバルガスがもうすぐ王位を退き、正当なる王位を持つソルデイスがその座に着こうとするこの時に、何故彼がこのような事を

するのか。

傍らにいるソルデイス王子を見ると眉間に皺を寄せ、何かに耐えるように目を閉じていた。

「城の被害・・・敵の状況、こちらの状況は」

呻くように呟くソルデイスに、男はすつと頭を下げた。

「ダイナラーデ卿の私兵ならびに支援者の兵はすでに王都に入り、城を取り囲んでおります。敵の数はおおよそ10万、こちらの兵は近衛兵一万のみ、城を囲む城門はすでに敵の手に落ち、脱出は不可能か・・・」

余りにもひどい状況に、サイラスもクラウスも息を飲んだ。多少、剣の腕に覚えがあったとしても立ち向かえる数ではない。それに逃げるにしても城門が落ちていいる以上、敵の知らない様な道を探し出さなければならぬ。

それにしても10万という数はリディアの国の兵士の1/3の数に当たる。つまりそれだけの民が王に牙を剥いたのだ。

「レティア姫、ルミエール姫とヘンリー王子と共に投降してください。隣国の王族であるあなたをダイナラーデ卿も無碍にはしない筈です」

ソルデイスの申し出に対して、レティアの瞳が怒りに輝く。

ルミエールはソルデイスの近くまで行くと、その服の端を握り「いやだ」と首を振る。

「それは危険だと思います。」

現在、傭兵達が功を得ようと城の中を歩き回り、十代の少年を殺害しています。最初にあう兵士がダイナラーデ卿かその他支援者の兵に見つかれば無事でしょうが・・・」

事態は常に悪い方向に向かっていいるらしい。

ルアンリルは傳いたままの兵の前に立つと彼の目を見た。

どこことなく、誰かに似ている顔だ。焦げ茶色の髪と水色の瞳、暗がりの中でも判るほど造作は整っており、瞳に強い色が宿っている。「貴殿の名前を押しええ下さい」

彼はにつこりと笑い、年若い魔法使いの長に自分の名を名乗り、自分の剣を鞘ごと差し出す。

「私はフェルスリユート・ガジエツト。大將軍・ガイフィード閣下の配下です」

男の名前は聞いた事のない名前だが、大將軍と呼ばれるガイフィード卿のことは誰もが知っていた。

差し出された剣には確かに大將軍と呼ばれソルデイス王子の王位継承を強く望んでいたガイフィード卿の部下の証がその鞘には刻まれており、それが彼の身分を示していた。

「ガジエツト卿、この様な状況の中ですが、ロシキスの王子達を連れて逃げる事は可能ですか？」

「ルアンリル・フィーナツ！」

まだ見知って間もない兵に対しての願いに、ソルデイスが不満の声を上げる。

だが聞かれた本人は、しっかりとルアンリルの問いに頷く。

「顔をあまり知られていないロシキスの王子・王女だけでしたら可能だと思います」

王と一緒に市中を歩いた事のあるサイラスや、父親にうり二つのクラウス。そして光なす黄金をもつソルデイスは全ての意味で目立ちすぎる。

彼らをつれて逃げるのは至難の業とあっていい。

だが、まだ王族となつて日の浅いルミエールやヘンリー、そして王女らしさがどこか駆けているレティアだけなら、城の外に出ればなんとか逃げ仰せすることもできるだろう。

「頼みます」

「承りました」

フェルスリユートは簡潔に返事をするとう立ち上がり、まだ戸惑ったままの隣国の王子王女へと手を差し出した。

レティアは再度、鞘から剣を抜くと不満そうに・・・不安そうにフェルスリユート達を見ているソルデイスへと歩を進めた。

「これ、持っている」

不意に出されたペンダントにソルデイスは目を瞬かせた。

「お前が何を考えているかは判らない。だが、お前はいつでも自分の命に希薄な部分があるのを私は知っている。だから、次に逢う時、これを私に返せ」

『生きる』と言ったところで飄々と交わされることを知っている幼なじみとしての言葉だった。

ソルデイスはそれを受け取ると

「お前、本当にいやな奴だな」

と、文句をつけた。差し出された者はレティアが竜騎士となった時に自分で作ったドッグタグだった。

「その嫌な奴の者を借りているのは嫌だろう。だから次に逢う時に、生きたお前が返せ」

「憶えておく」

ソルデイスは自分の胸にそれを付けた。

レティアはそれに安心すると、こちらを見ている3人の元へと駆けて行った。

「王子と仲がいいんですか?・・・」

恋仲なのかと勘ぐってくるフェルスリユートにレティアは嫌そうな顔をした。

「あれは友人だ。悪友というのが一番近い。あれに対して恋愛感情を抱くぐらいなら、そこの犬とでも恋をする」

その言葉に問いかけたフェルスリユートは呆れた顔をした。仮にも他国の王子に対していうべきことではないように思う。

逆にほっとしたのは彼に手を引かれていたルミエルだ。どこか幼い恋心を抱き始めている彼女はレティアとソルデイスの親密な様子に無意識の羨望を持っていた。

そんな二人の様子にレティアは小さく笑った後、すぐに表情を引き締めた。

今は一刻でも時間は惜しい。自分が「生きる」と彼に言った以上、

自分も生き残らなければならない。

自分によくしてくれたロシキスの新王に早く子供達を返し、約束を果たす。それが、彼女のすべきことだった。

彼女の表情の変化に呼応するようにフェルスリユートも気を引き締め、今度こそ生き残るための第一歩を踏み出した。

第十二話 生きるための約束（後書き）

どんどん長くなってしまい殆ど二話分近い文字数となってしまった十二話目です。

この後ロシキス王女たちと行動を共にするフェルスリユート登場です。

しばらくの間はリディアの王子たちのみで話は進みます。

第十三話 地下迷宮への逃亡

ロシキスの王女達と別れた王子たちは、ソルデイスの先導の元、城の中へと移動した。

フェルスリユートの言った通り、城の中は無法状態に近くなっていた。

泣き叫ぶ子供の声、女の悲鳴・・・男達の断末魔など聞くに堪えない様々な音がそこから響いてくる。

国王主催の王子の誕生日という事で武装している者がいなかったのだらう。貴族は殆ど抵抗できずに捕らえられるか、寝返るか、殺されるかをしている。

ソルデイス達は一区域一区域の敵を全滅させながら的確に目的地へと進んでゆく。

その行動の中でも一番目を引いたのは国内随一といわれるクラウスの剣技とそれとひけを取らないのではないのだらうかと思わせるソルデイスの剣技だった。

たしかにサイラスもルアンリルもそれなりに秀でた剣技を持っていたが、この二人にはか適わないだらう。

「それにしても、お前、左ききだったっけ」

剣を器用に左手で使う弟にクラウスは不思議そうに聞いた。

彼の記憶の中の弟はいつも右に剣を持っていた。

「あんまり使わないようにしてるけど」

少しだけ息をあげながら、ソルデイスは何でもないようにその問いに答える。

そして、他の人を一掃したのを確認すると人目に付きにくい細い廊下に入った。

「ここだ」

ソルデイスはそう言うと壁の一角をある一定のリズムで順番に叩いていく。

ギイ・・・

最後の一個を叩いた瞬間に壁に掛かっていた姿見が壁から少し浮いた。ソルデイスはその間に指を入れて満身の力を込めて引いた。そこに開いたのは地下に続く階段だった。城の中なのにそこは壁紙も貼られて折らず、石壁がむき出しになっていた。

彼らは人が来ない内にそこに入る。今度は年長のサイラスとクラウスが二人がかりでその鏡の扉を閉めた。

広がる暗がりの中、慣れた手つきで彼は壁にかかる松明を取ると、ルアンリルに渡した。

「炎よ、灯れ《ファイアグロウ》」

ルアンリルが小さく呪文を唱えると、小さな火花が松明の先で煌めき炎を灯した。

ソルデイスはもう一本、松明を持つとルアンリルの松明から炎を移した。

揺らめく炎に照らされた階段は先が見えないほど深く長く続いていた。緩やかにカーブになった先は闇に包まれて、どうなっているのか判らないほどだ。

「こんな場所、あったんだ・・・」

「王を継ぐ者のみが教えられる通路だよ。昔、お祖父様が僕に教えてくれた」

嘆息するように呟くクラウスにソルデイスは淡々と答える。

祖父がなくなったのはソルデイスが7才の時である。本来ならばまだ王位継承が確定していない年齢である。それなのに前王は来るべき事態を考えて彼にこの道を教え込んだ。

「先を急ごう。王都が占拠されているといっても全ての家に押し入っているわけではないはずだ。今の内なら逃げられる」

ソルデイスの言葉に、年長の王子たちも頷く。時期を逸すれば逃げ出す事すらできなくなる。

「お父様とお母様は？」

「きつと、逃げています」

不安がるシエリルファーナにソルデイスは何とか笑ってみせた。

だが彼女は大きく首を振ると年の近い兄にしがみつく。

「だって、この道は王を継ぐ子供だけが知って居るんでしょ？お父様は王位継承がなかったんだからきつと知らないはず・・・お母様だって、逃げられなくて困っているかもしれない」

それは的を射た問いかけだった。ソルデイスは震えそうになる体を拳をきつく握る事で押さえた。

動揺を悟られないようにしてみせるのだが、妹の真っ直ぐな瞳はすぐに彼の欺瞞をうち砕く。

「助けにいつちゃ駄目なの？」

ソルデイスにとつて父は忌む者であってもシエリルファーナにとつては自分を溺愛してくれる普通の父親だった。彼女が彼らを父と母を救おうとするのは当たり前前の行為なのだろう。

「王の間になら寄る事はできる・・・だけど父上が離宮に行っていた場合は、行く事は出来ない」

ルアンリルに最高神官からの呼び出し状を出したぐらいだ。暴動が起きた時、たぶん父親は呼び出しの場所である離宮に向かっていたはずだ。

その王が暴動の起きている王城の本宮に戻るとは思にくい。

もし王の居住スペースである王の間にいるとすればそれは母のみだろう。

「それでいいのなら、迎えに行こう」

兄の申し出にシエリルファーナの顔が明るく輝いた。

ソルデイスは妹の素直に喜ぶ明るい笑顔にどこか寂しげな表情を一瞬だけ浮かべると、それを振り払うかのように先頭にたつて階段を降り始めた。

第十三話 地下迷宮への逃亡（後書き）

戦闘シーンを書くのはどうしていいものかと悩みます。

書くとき楽しいんですが、なんかありきたりで・・・血がどばどばと出るのって苦手なので中途半端な感じになってしまいます。

第十四話 王の間の別れ

秘密の地下通路は王城の壁の間を器用に縫って造られており、様々な分かれ道で通る人を惑わせていた。

ソルデイスはその一つ一つの角をしつかりと確かめながら、的確に道を選んでいく。

「場所的に、もう近くだよな」

旅慣れていて方向感覚が優れているクラウドは先を行くソルデイスに確認する。

「うん、もう後は一本道だよ」

入り組んだ道をすべて憶えているのか、彼はそういうと現れた角を曲がる。現れたのは大きな鉄製の扉だった。彼はドアの横に掛かった鍵を外すと鍵穴に入れる。

カチャン……

小さな音を立てて鍵が開く音がした。彼はノブを握ると重いそのドアを開く。

現れたのはごちんまりとした小さな部屋だった。5人も入れれば窮屈さを感じる。部屋には逃げる時に必要な貴金属などが用意されていた。

ソルデイスは部屋を突っ切ると反対側にかかったカーテンを開けた。

そこにあっただのは王の間の風景だった。まだ傭兵達もここまではたどり着いていないのか、王妃が一人で椅子に座っていた。

「母様っ！」

シェリルファーナは透明な壁の向こうにいる母親を呼んだ。だが、その声は彼女に届かない。

「シェリル、少しどいて……これは魔法の鏡だから、こちらの音

も姿も向こうには届かない。向こうからはこれは単なる大きな姿見なんだ」

彼はそう言うと、透明な壁の横についた奇妙な模様を順番に押ししていく。6回ほど模様を押しした所で、カチャン・・・という小さな音が響いた。

「クラウス兄様、サイラス兄様。少し手を貸して」

ソルデイスの呼び掛けに、二人は頷くと一緒に透明な壁に手をついて押した。

思ったよりも軽く、その扉は王の間の方に向かい開いた。

「誰ですっ！」

急に開いた鏡に、王妃・ソフィアは鋭く声をあげた。

だがそこから現れた4つの顔を見た途端、彼女は安心したように肩を降ろした。

「母上、無事で何よりです」

「あなた達も、無事で・・・」

ソフィアは感極まったようにソルデイスの身体を抱きしめた。

この暴動を起こした者の標的が13歳になるうとしているこの王子だとソフィアは少なからず理解していた。

リディア王国の唯一の王位継承者、この息子がどれだけ夫に疎まれようと彼女はずっと彼を愛していた。

「逃げましょう・・・母上」

久しぶりに感じた母の温もりを抱きしめながら、ソルデイスは彼女にそう促した。

やはり国王はルアンリルを呼び出した離宮に行っていた。あの離宮は王城でも本宮から外れており、城の背に広がるファードント山脈に面しているので上手くしたら彼は逃げられるだろう。

それよりもこの場に残された王妃の方が普通に考えても危ない状態だ。

「しかし、陛下が・・・」

彼女にとっては国王も愛する家族であった。例えその貞操を疑わ

れても・・・そして、彼には言えない秘密があっても彼女は彼女なりに国王を愛していたのだ。

「父上は、違う場所で逃げているはずです。今の状態では貴女の方が危ない」

いつもとは違う第三王子の険しい眼差しにも、彼女は屈する事はない。

もう一度、ソルデイスの身体を抱きしめると、彼をルアンリルの方に渡した。

「私は、王妃です。国王と共にではないと逃げる事はできません。

それに色々と顔が知れている私が一緒だと貴方達の足手まといとなりましょう」

彼女は次にクラウスの身体を抱きしめた。その感触を忘れないようにと強く回る腕に、彼も強く答える。

「クラウス、あなたの剣の腕を信じます。唯一の王位継承者たるソルデイスを無事に護って・・・貴方自身も護って生き延びなさい」

クラウスの小さく「はい」という声に、彼女は「頼みます」と念を押し、彼の身体を放した。

そして、クラウスの隣にいるサイラスの身体をしっかりと抱きしめる。彼は戸惑ったように小さくその腕を彼女の背に回した。

「サイラス、あなたの知の力を信じます。弟と妹と、そして自分が生き残る道を見つけて逃げなさい」

言葉が終わると同時に、サイラスは母の身体を強く抱きしめた。

あまり母親らしいと感じた事はなかったが、彼女が自分たちを愛してくれていると深く感じた。

暫くの包容の後、王妃はサイラスの身体から離れると、自分の足元で不安そうに見上げてくる小さな姫を抱きしめた。

「シェリルファーナ、兄様たちの言う事をきちんと聞き入れ、理解し、足手まといにならないように行きなさい」

撫でつけるように髪を梳く指先に、シェリルファーナは大きな涙を浮かべた。

誰よりも両親に愛された姫は、大きな声で泣きたいのを必至で堪えながら、母の言葉に何度も何度も頷いた。

王妃はシェリルファーナの身体から少し離れると、もう一度ソルデイスのもとに行き、なかなか触れる事も許されなかった愛しい王子の身体を抱きしめる。

「ソルデイス。貴女は唯一の王位継承者です。あなたが居れば、王家は復活し、リディアの平和も取り戻せるでしょう。何が何でも生き延びて、家族を護るのです」

家族を護る その言葉にソルデイスは強く頷いた。

「母上も、気を付けて。そして、どのようになるかと生きてください」

ソルデイスは、そういうと抱きしめてくれる母の頬に別れのキスをした。

シェリルファーナ、サイラス、クラウスという順番で彼らも別れのキスをするると自分たちが入ってきた鏡の扉の中へと入る。

最後に残ったルアンリルが、深々と王妃に頭を下げた。王妃もルアンリルに深く頭を下げてから、

「エディン卿ルアンリル・フィーナ殿。息子達を頼みます」と、短く別れの言葉を述べた。

彼女は強く頷き、王子達に遅れて鏡の扉へと入る。

それと同時に鏡の扉は閉まり、もとの普通の姿見へと戻った。

「元気で、いきなさい」

王妃は鏡の向こうにいる子供達に告げると、先程、彼らが来る前にしていたように椅子に座った。

その視線は、一切鏡を見ることはなく、全てを隠し通すように入り口へと向けられた。

第十四話 王の間の別れ（後書き）

なんか段段と一話あたりの字数が増えてきているような気がします。できただけ1500を目安に話をきっているのですが、やはり話の流れの区切りを考えると伸びてしまいます。

今回は、いつも小説を打っている機械が急にいうことを効かなくなつたため急遽他のノートパソコンで打っています。キーボードの感触等が違ってめちゃくちゃ打ちにくい状態です。

第十五話：偽りの真実

王妃と別れた後、彼らは少しの間だけ隠れ部屋に潜んでいた。

言い出したのはクラウス。わずかの時間だけでも父が来る事を待とうという考えからだった。

鏡の扉の開け方は、やはりソルデイスしか知らないらしい。

バルガスが何かの気まぐれで戻ってきたとしたら、王と王妃の逃げる道がない。

「父上は、絶対に戻らないよ」

ソルデイスは呆れたようにわずかの望みを口にする兄を諫める。

サイラスも同じように思うのか、年の近い弟の肩に手を置くと首を静かに首を振った。

「俺たちのすべきことはここを無事に脱出することだ。ソルデイスを無事に王都から連れ出し、ディナラーデ卿から王権を取り戻す助力をするのが使命だろう。父上が戻られるのを待っていても更に状況が悪化するだけ・・・王都を取り囲む兵が検問を始めたら逃げることなどできない」

サイラスの言葉を理解できるのかクラウスは唇を噛み、肯く。だがシェリルファーナは透明な扉の向こうに見える母の姿に、なかなか肯くことができなかった。

「この鉄の扉のほうは開けていこう・・・いざとなったら、この鏡をやぶり入ることができる。通路はいずれかの出口に必ずつながるようになっているから、もしかしたら逃げられるかもしれない」

ソルデイスはそういうと通路側の入り口をこんこんと叩いた。それでようやく安心したのか幼い姫は小さく縦の頭を振る。

『元気で。いきなさい』

最後に鏡にむかって掛けられた母の言葉に、サイラスも辛そうに顔をゆがめる。

王妃は言葉がこちらに聞こえているとは思わなかったのか・・・

それとも敵が乱入してきた時に王子たちの場所を知らせないようにするためになのか、その後、こちらをちらりとも見もせず椅子に座りなおした。

クラウスは思いを振り切るように通路へと出る。サイラスは一礼をしてから弟の後を追った。シエリルファーナはもつれそうになる足元をルアンリルに支えて貰いながら部屋を出た。

最後に残ったソルデイスは適当に扉を開けたままに固定すると、「それでは僕たちだけで先に行きます」

と少しだけ寂しそうな笑みで彼女には届かない別れの言葉を口にして兄たちが待つている通路へと走っていった。

王妃はただじつと椅子に座って待っていた。

最後に王子たちと再会できたことへの喜びを胸に、自分が対峙しなければならぬ相手を待っていた。

ほどなくして王の間の控え室より大きな怒号とともに扉の開く音がした。自分たち付の侍女の悲鳴が聞こえる。

「抵抗しなければ、危害は加えない。王妃はいるな？」

訊ねている声は聞き覚えのある若い男の声だった。返事を待たずこちらに向かってくる足音に体が崩れそうになる。

「お久しぶり、ですね。ソフィア王妃・・・覚えていらっしやいますか？」

現れたのはディナラーデ卿ウィルフレッドだった。

戦闘に適した動きやすい服を着ていた。すでに幾人かの人を殺めたのか、所々返り血を浴びている。

「ウィルフレッド・・・」

懐かしい記憶の中にいる彼は自分たちの息子と殆ど同じぐらいだったはずだ。もう二度と会うはずのないその人と王宮で会ったときは、自分の心臓が止まるかと思った。

そして今の彼は自分の隠していた事実を知り、こんな戦いを起こした。

「その名前で呼ばれるとは思いませんでした。ずっと『ディナラーデ卿』でしたからね」

吐き捨てるように言われる言葉に、彼女は沈痛な面持ちで目の前の青年を見上げた。

「あの王に汚されつづけた、私の息子はどこです？」

告げられた言葉に彼女は息を飲んだ。

やはり彼は自分が他の息子を生かすために、彼の息子を犠牲にしたのを知っていたのだ。

「あなたの、息子など、知りません」

それでも彼女は認めることなどできなかった。

彼はあきれたように肩をすくめると、その腰に携えていた剣を引き抜き王の間に飾られていたバルガスの肖像画を切り捨てる。

ひつという息を飲み込む音が、自分から響いたが彼女は気をなんとか落ち着け、毅然とした態度をとろうとする。

「あなたは、とても勝手な人だ。最後だからと私を求め、勝手に子供を作り・・・その子を犠牲にしてあの男との間にできた自分の子供たちだけを安寧と生かした。あなたは明日になればすべて何事もなく過ぎると思っていたのでしょうか、私はそうならないことを知っていた。

第一即位後のソルデイス王子が真実を知ったときにどうなるのか、それよりもソルデイス王子の王位継承を遅らせるため卑劣なあの王がどのような駒としてあの子を置いていたか知らないでしょう」

かつての幼馴染み・・・幼き恋の相手から告げられる衝撃的な言葉に王妃は顔色を失う。

「もう一度、問います・・・私の息子であるサイラス・ジェラルドはどこです？」

突きつけられる言葉の刃に砕けそうになりながらも静かに首を振った。

第十五話：偽りの真実（後書き）

やっとウィルフレッドが再登場しました。

衝撃的なことを言っていますが、ウィルフレッドが語ることは取りあえず真実が多いです。

誰が悪なのか、誰が誰の正義なのかはまだぜんぜん出せていない状況で、取りあえず物語りの佳境に入ってしまったような気がします

第十六話：空蟬の死骸

ウィルフレッドはなかなか真実を述べようとしない王妃に冷たい視線を向けた。

どのように彼女を陥落させるべきか考えているような仕草に、彼女は目を閉じて彼の姿を見ないようにした。背筋には冷たい汗が先ほどからずっと流れている。

言いようのない沈黙が起きた。

しかし、その沈黙は長くは続かなかった。

騒がしい足音ともに恰幅のいい男が部屋の中に入ってきたからだ。「ウィルフレッド様、こちらに見えられましたか」

小脇に白い布でくるまれた大きな球状の物体を抱えた男に王妃は目を見張った。その人物はかつて夫である王に取り入り、將軍位を得たはずのオーランド卿だったからだ。

「さすが、ウィルフレッド様だ。王妃殿を押さえましたか」

かつて王にそうしたように彼は大きな熊のような体格には似つかわしくない猫なで声でウィルフレッドを褒め称える。

ウィルフレッドはそのような世辞に関心はないのか、目線の先にある物体に視線を向けた。

白い布からはなにやら赤い染みがにじみ、その中にあるものがあり気持ちのいいものでないことを示している。

「実は、王を見つけましてな・・・抵抗するようでしたから殺してしまいました」

自国の王を殺したのに悪びれもせず、彼は白い布を取り払う。

そこから転がったのは男の生首だった。

愛する夫の無残な姿を見た王妃は、転がる首をしばらく見てから頭を抱えてしゃがみこんだ。「い・・・い・・・いやあああああ

「ああっ」

王妃の叫び声は、王の間中に響き渡り鏡の向こうの通路にも届いたのだった。

その声に気づいたのは王の間を最後に出たソルデイスだった。

泣き叫ぶ、母の声。

何が起きたのかわからないが、自分の予想しなかった何かが起きたのだけはわかった。

「今のは、母様？」

ルアンリルに連れられていたシェリルファーナにもその声が聞こえたのか、階段の途中で足を止めて耳を澄ませた。

やはり母の声だ。彼女に何かあったのだ。シェリルファーナは肩を支えるルアンリルの手を払うと、後ろを走っていた兄・ソルデイスの脇を抜けようとする。

しかし彼が腕を捕まえたことで、彼女の足は止まった。

「今から言っても間に合わない・・・」

「でもつでもつ・・・」

常にはない真剣なまなざし、彼には何が起こっているのかわかっているようだった。

彼女は必死になって、兄の腕から逃れようともがいた。

不意に、その手が外れてシェリルファーナは階段を2、3段駆け上がる。

何がおきたのかと振り向くと今までどうやって隠していたのか、大きな赤い染みがソルデイスの右腕の部分にできていた。どうやら暴れる彼女を押さえるために、右腕も使用したため、傷口が開いてしまったのだらう。

「ごめんなさい、ソルデイス兄様」

シェリルファーナは自分がしたことに罪悪感を感じながらも、兄

に背を向けて自分たちがいた王の間へと駆け上がる。

ルアンリルは傷の痛みにうずくまるソルデイスに急いで駆け寄ろうとした。しかし彼はすさまじい勢いで駆け上る妹の後姿を指差した。

「ルアン、シエリルを追って！早くっ！！」

彼は自分のポケットに入ったハンカチを出すと手馴れた仕草で止血を開始している。ルアンリルは彼の言葉に従い、末姫を追って王の間へと駆け戻った。

短い距離からか、それともシエリルファーナの足が速かったのかルアンリルが彼女を捕捉できたのはあの透明な扉の部屋だった。

開け放してあった鉄製の扉を抜けたところで、少女は呆然と立ち尽くしていた。

「お父様……？」

つぶやく彼女の視線の先に転がるものをルアンリルは最初理解できなかつた。

見開かれた目、だらしなく開いた口から零れている舌……そして何より首から下が何も無い。あるのは真っ赤に染まったじゅうたんのみだ。

透明な扉の向こうでは同じように衝撃を受けた王妃がこちらを向いて床に座り込んでいる。

「いや、……お父様……うそでしょ？」

ルアンリルは幼い彼女にこれ以上その悲惨な現場をみせないように、震える体を腕の中に抱きこんだ。

そして、今度はもつと詳しく転がる首を見た。

確かに、バルガス王だ。水色の瞳……死に顔のせい少し歪んではいるが確かに王の顔だ。

だが何かが違うようにも見える。

「父上の影武者だな・・・」

自分の後ろから突然届いた声にルアンリルは驚いて振り返る。そこには腕の治療を澄ませたソルデイスが忌々しそうに転がる首を眺めている姿があった。

「シエリル、あれは父上じゃない」

ソルデイスが断言すると、ようやくルアンリルの胸の中で自失していたシエリルファーナが視線をあげた。

「あの男が出ているということは、やはり父は逃げたらしいな」

無残な生首を前にしても眉一つ動かさずに状況を述べるソルデイスに二人は何か違う人物と相對しているのではないかと錯覚する。

それとも普段自分勝ちが見ていた彼が偽者だったのだろうか・・・。

「やはり、あの人が母や僕たちを迎えにきてくれるはずは、ないんだ」

ソルデイスはただ辛そうに小さく呟いた。

第十六話：空蝉の死骸（後書き）

実はウィルフレッドを書くのは楽しいです。

何を考えているのか作者にも不明なソルデイスやお姫様は書きにくいんです。

ちなみに先に下りていったサイラスとクラウドは悲鳴も喧騒も聞こえておらず、分かれ道の手前で待ちぼうけ状態です。

第十七話：見えない邂逅

ルアンリルの腕の中で震えていたシェリルファーナは兄の言葉に
縋る様な視線を送った。

あの恐ろしい物体を見たくないのか、透明な扉にずっと背を向けて
いる。

「本当に、お父様じゃないの？」

「うん、違うよ。今は確かに同じに見えるだろうけど、明日には魔法が解ける」

ソルデイスの言葉に、ルアンリルが王女の扉越しにその物体を凝視した。確かに魔法の切れ目がそこらかしこにある。

あの従兄がそれに気づいていないはずはない。その考えと同時にルアンリルの背を、少し冷たいものが走った。

そうだ、自分と同等の魔術師である彼が扉一枚だけ隔てただけとはいえ、近くに自分の存在に気づかないはずがない。

視線を移動させるとウィルフレッドがこちらを見ていた。視線は自分でないところを見ているせいかわ合わないが、彼はこちらを見ていた。

「ルアン、ここは魔術の防壁もあるから気づかれぬ」

その言葉を裏付けるように彼は鏡の前に転がる生首を拾うとすぐに踵を返した。

「これは、バルガス王ではない。・・・大方、適当に作った影武者だろう。魔術の綻びをとれば」

彼は生首の上に手をかざすと静かに「解除フェード・ウェイ」と呪文を唱えた。魔術のほころびから魔法はすぐに解けて、下から別の見知らぬ男の顔が出てきた。

「これを捕まえて喜び勇んでいる間にあの卑劣な王は城を抜け出しているだろうな」

別人に代わった生首をぽかんと口を開けてみていたオーランド卿

へとウィルフレッドはそれを投げつけた。彼は忌々しそうに受け止めると、炎をたたえる暖炉の中に生首を叩き入れる。

とたんに鼻につく臭いが辺りに満ちた。彼はそれに鼻をならすと、部下を引き連れてもう一度王を捕らえるために出て行った。

「行きましよう・・・王子、姫」

その一部始終を見ていたルアンリルはまだ立てない王女を抱き上げ、ソルデイスに促した。

しかし彼は扉を凝視したまま、少しも動こうとはしない。

扉の向こうのウィルフレッドはちらりとこちらを見た後、あまりのショックに意識が朦朧としている王妃の腕を持ち、自分の方に視線を向けさせる。

焦点が少しおかしい目に、これ以上の詰問は無駄と判断した彼は控えの間でがたがたと振るえている侍女と侍従を呼びつけ、彼女を王の間から連れ出した。

それと入れ違うように茶色い髪の青年が王の間へと入ってきた。口元に歪んだ笑みを浮かべたその男もバルガス王の側近として仕えていたはずだと、ルアンリルは眉を顰めた。これほど根深い裏切りに憤りよりも、強く恐れを感じずにはいられない。

「兵の配置は終わっております。王城の入り口には兵を立たせ、城の中もくまなく探すように指示を与えてあります。また万が一、城から逃げたとしても王都を守る3枚の城壁のそれぞれの入り口には兵が配置しており、王族・貴族の顔に精通するものを使って検問も行っています」

磐石の態勢だと言わんばかりのトランド卿に彼は冷たい視線を向けた。

「先ほどより、貴殿の兵は略奪、陵辱、殺害ばかりで一向に王子達を見つける気配など感じられないのだが、それは私の気のせいか？」

ウィルフレッドの言葉に、男は顔に血を上らせた。

男はもともと小さい領地の領主であるため、兵はさほど持っていない。それゆえ金を出して傭兵を雇い入れたのだが、彼らは統率さ

れた兵とは違い目の前の欲望に忠実すぎた。

「成人もしていない王子たちに出し抜かれることは無きよう、努力をしてくれ」

ウィルフレッドはそれだけ言うと出て行けとばかりに、視線を入り口の方へと向ける。トラント卿は返す言葉もなく、齒軋りしながらその場を後にした。

誰もいなくなった部屋でウィルフレッドはじつと鏡を見ていた。ソルデイスは魔法で向こうを写しているその扉を介して、ウィルフレッドを見ていた。

「昔、父より王の間の鏡の裏には通路があると聞いたことがある。ソルデイス王子、ルフィーナ、そこにいるか？」

向こうからは見えないのか彼の鏡に向かう独白は、まるで独り言のように綴られ続ける。

「悪運が続く限り逃げつづけなければいい。私は私の信じた道を進む。

私の妹の持つ『光なす黄金』、そして私の持つ『見透かす心』・・・二つの王位継承を証を持って私は彼女とともにこの国の王となる。もうこれ以上の偽りの王の治世は、許さない」

どこか悲しく、だが強い言葉にソルデイスは静かに肯くと、これで気は済んだとばかりに鏡に手をつくウィルフレッドに背を向けた。「今は、見逃そう。いつか顔を見て会合する時、すべて志雄が決すると思え」

「わかっている、デйнаラーデ卿」

相手には聞こえない答えを静かに呟いたソルデイスは、ルアンリルたちを連れて部屋を出た。

彼は自分が施した扉留めをはずし、まだこちらを見ているウィルフレッドの姿を残して鉄の扉を閉めたのだった。

第十七話：見えない邂逅（後書き）

ウィルフレッドの真実が少しだけ出ました。

アーシアは『光なす黄金』を持っており、外見だけなら王位継承者です。

ちなみにウィルフレッドとアーシアとは6歳ぐらいはなれています。

修正のあとがき

一度目の修正で、ウィルフレッドが王位継承の証である『見透かす心』を持っている記述を外してみました。やはり後々に響くことが判り、復活させました。王都脱出編の修正が全て終わったらその辺りの記述がおかしくないか、最後にもう一度チェックします、

第十八話 地下の作戦会議

鉄の扉の施錠を終えるとソルデイスはルアンリルと共に階段を駆け下りた。

途中までは一本道で分かれ道もないので迷うことも躊躇することもない。ソルデイスは足元に注意しつつも目を見張る速度で駆けていく。

ともすれば、王女を抱いたままのルアンリルは置いていかれそうになる。

まだ分かれ道になる手前で、不意にソルデイスは足を止めた。王子と同様に足を止めたルアンリルの耳に上ってくる足音が聞こえた。敵か？と思ひ、目を凝らすルアンリルのためにソルデイスは明かりを移動させた。照らし出されたのはクラウスの顔だった。

「どうした、遅かったじゃないか」

どうやら分かれ道で少し待機した後、彼だけが上ってきたようだ。クラウスは3人の傍まで行くと、ルアンリルの腕の中で意識を失っていた妹を受け取る。

「説明は、サイラス兄様のいる所です。逃げる道も考えなくちゃいけないから」

ソルデイスはそう告げると後残り少しになった階段を一気に駆け下りる。

面食らったクラウスが隣にいるルアンリルに視線で問い掛けるが、ルアンリルは無言で首を振り先に下りた少年王子の後を追い、階段を降り始めてしまった。

仕方ないと思ったクラウスはしっかりと妹をその腕に抱きかかえると、2人に遅れないように元来た道を引き返した。

クラウドが到着するのを待つて説明された内容にクラウドとサイラスは顔色を失った。

やはり、先ほど無理やりにも王妃を連れてくるべきだったとクラウドは自分の判断の甘さに舌打ちする。

「それでは、父上は逃げられたのだな・・・」

「たぶん、自分の影武者が殺されている隙に・・・」

サイラスの確認に、ソルデイスは簡潔に答える。暗い通路の中で交わされる言葉は、父のこと、母のこと、そして兵の配置のことへと進んでいく。

「しばらくこの通路で待機してから脱出するという手もあるが・・・」

「かなり危険な賭けになりますね」

クラウドの言葉にルアンリルは静かに首を振る。

食料のないこの状況でこの通路にいてもいずれ餓死するだけだ。

抜け出すとしたら体力的にも余裕のある今のうちしかないだろう。

「たぶん、王族に面識のある者と言っても目印にするのは僕のこの頭だけだろう。この光を魔術で押さえれば、ある程度は誤魔化すことはできる」

ソルデイスはそういうとこの闇の中でもきらきらと光りつづける自分の髪の毛を指先で摘んだ。

「・・・そんなことできるのか（んですけど）？」「・・・」

口を揃えて尋ねてくる年長者に、ソルデイスは「後で見せてあげる」とだけ言ってこの場は逃れた。

「とにかく、この通路の先に進もう。一番最後まで行けば、王都の二の郭に出られる」

今は王の間がある城の中心部の辺り、今からこの通路を抜けて二の郭まで行くのには約1時間以上の徒歩の移動となる。

サイラスは眠ったままの妹姫の体をゆすり、目を覚まさせる。

「あ・・・サイラス兄様」

シェリルファーナは目の前で心配そうに見下ろしてくる兄の顔を

見て安堵の息を吐いた。偽者とはいえ父そっくりの生首を見た彼女には兄弟の無事が唯一の心の支えだった。

「とにかく、先に進むことになった。ここからは大分長い道のりになる。歩けるな？」

彼女はその時になってようやくここが先ほどの部屋と違うあの暗い通路の中だと気が付いた。

つまり彼女を抱えてルアンリルがここまで連れてきてくれたということだ。

「うん、大丈夫。ルアンリルもごめんなさい。私のせいで」

「いえ、かまいません」

謝る王女にルアンリルは照れながら、体の前で手を振ってみせた。

「それじゃ、時間がないから進もう」

ソルデイスは立てかけておいた松明をもう一度持つと、曲がりくねる階段を順に折り始めた。

第十八話 地下の作戦会議（後書き）

王女、はっきり言って足手まといです。母親のいうことも聞かずに、兄たちに迷惑をかけています。まあ、十歳足らずということでご愛嬌としてみてください。

今回付けるはずだったタイトルは次回に回し、今回は会議だけで終わります。

第十九話：迷宮の外へ

長い階段を折りきるとそこからは緩やかな坂になっていた。先ほどよりも通路が広くなっている気がする。

所々で水が滴る通路を王子たちは息を切らしながら、駆け抜けていく。

「シエリル、大丈夫か？」

「うん・・・な・・・とか」

一番体力のない王女は何度も転びそうになりながらも、なんとか前を行く兄たちに置いてかれないように必死に足を動かした。舞踏会用の長いスカートはこういう時には邪魔なものだと彼女は心底思っている。

「もう、つくよ」

シエリルファーナと同じく、体力がないと思われたソルデイスは全く息も切らさず向かう先にある一点を指差した。

炎の光に王の間のとくと同じような鉄製の扉がちらちらと照らし出される。

更にスピードを上げたソルデイスは扉につくと急いで解除作業を行う。暫くして扉が少し浮くと同時にサイラスとクラウドは扉に手を掛けて、その重い扉を開いた。

現れた部屋は先ほどの王の間の鏡の裏の部屋よりも少し広かった。自分たちが入ってきたのとは違う扉が数箇所有り、そのどれもが王の間のとくと同じ透明の扉になっていた。

扉以外の壁には僅かながらの非常食や貴金属、そして靴や服なども用意されている。よく見ると鬘までが綺麗に飾ってあった。

「ここは？」

サイラスが透明の扉の向こうを観察しながらソルデイスに問い掛けた。彼は扉の内の一つを開錠し、そこにある武器を物色し始めている。

「二の郭と一の郭の境目にある厩舎だよ。馬とか馬車とかないと逃げられないと思って、ここにした」

どうやら王都の中にはまだこのような抜け道の出口があるらしい。サイラスは感心しながら扉の向こうを一つ一つ観察した。その中で唯一布の掛けられたものを覗くと、外には数頭の馬が見えた。この騒ぎで逃げ出したのか、厩舎番がいないことが救いだっただ。

「これ、借りていこう」

クラウスはソルデイスと一緒に武器を見ていたようで、適当な剣を手に取ると実戦にはあまり向かなかつた豪華な剣帯をはずして、シンプルなそれを自らの腰に巻きつけた。

「ルアンリル、この中の適当な服にシエリルファーナを着替えさせて」

どこから引き摺ってきたのか旅芸人たちが着る服が詰められた袋をソルデイスは部屋を中心に持つてくるとその中身を広げ始めた。

4人は自分にサイズが合いそうな服を選択するとそれに着替えた。豪華な服は違う袋に入れてそこら辺りに放る。

一心、身支度を整えたソルデイスは自分の頭に手を当てると、詠唱を開始する。

「光の精霊イリュース、闇の精霊エージェント……すべてのエレメントにかけソルデイスが命じる。光は奥に、すべてを覆い隠せ《ダージェス・フレール》」

詠唱が終わると同時にソルデイスの髪から光が消え、黄金色に輝いていた髪が黒く染まった。

「精霊魔法、ですか？」

「僕たちの髪が輝くのは自分たちの中にある光が洩れているせいだからね。精霊を使って光を体の奥にしまって、闇を使って封じれば髪の毛は元の色に戻るんだ。僕の場合は祖父様譲りの黒髪」

確かに光なす黄金の髪でなくなった王子はどこか別人に見えた。

「兄様たちも、黒かそこらの髪をつけて。シエリルも……」

髪をつけてといおうとしたソルデイスの眼には、ぱっさりと髪を

落としたシェリルファーナの姿があった。服装もスカートではなく少年の衣装をつけており、顔の色は専用のニスで褐色へと変化させている。瞳の色はルアンリルの魔法で変化させたのか、深く暗い緑へと色が変わっていた。

「あいつらが追っているのは男3人、女1人のグループなんですよ？ だったら私が男になったら少しは霍乱できるでしょ？」

健気に笑う妹姫の姿にソルデイスは優しく頭を撫でてやる。

そして自分は飾ってある鬘の中から長い黒髪のを二つとると傍に立っていたサイラスに手渡す。

「サイラス兄様は女性用の楽師の衣装を着けてください。クラウス兄様はシェリルみたいに肌の色を変えて、剣士の格好を・・・僕は時守の民の女性の衣装を着て、占い師の振りをします」

ソルデイスの誕生を祝う宴のために王都には様々な旅芸人が来ていた。

彼らは争いを好まず、争いが起こるとすぐにその場を離れる傾向がある。今の時間ならば、王都を脱出しようとする彼らの群れに入る可能性が高い。

ソルデイスの考えを理解したのか、彼らはすぐに変装に取り掛かる。

もとより剣士としての生活が長いクラウスは一番初めに着替え終わり、雰囲気を変えるためにルアンリルに髪を更に短く切ってもらった。

女性の服を選んだサイラスはシェリルファーナに背中ボタンを留めるのを手伝ってもらいながら、ジプシーがつけるような装飾品で自身を飾り始める。

ソルデイスは慣れた手つきで占い師の服を着ると、それらしい小道具として貴金属としてはあまり価値のない水晶や香を持ち出す荷物の中へと入れた。

第十九話：迷宮の外へ（後書き）

なんとか地下通路から脱出しました。後は王子たちが王都を物語の大半が終わります。

まだロシキスの姫君たちやアーシアのことなど書くことは満載ですが、一応終わりが見えてきました。

第二十話：恋人未満の約束

着替え終わったソルデイスは急いでもう一つの扉を開けた。

そこには町の人が使うような粗末な馬車が置いてあった。彼が急いで馬車の具合を確かめている間に、用意の済んだクラウドスが荷物を積み込んでいく。

確認し終えたソルデイスは、今度は先ほどサイラスが除いていた厩舎側の扉を覗き、外の様子を確かめる。誰の気配も感じないのを確認し手早くドアを開錠するした彼は、クラウドスと共に厩舎の中でも見栄えのよくない馬を2頭選んで旅立つための準備をしている部屋へと連れ込む。

ソルデイスは自分が連れてきた馬をサイラスに託すと、ドアを急いで閉めて施錠をしていく。

すべてが済み、カチャリ・・・と鍵が落ちるのと同時に厩舎の中に数人の兵が入ってきた。立派な馬のほうから適当に頭数を確認しているのだろう。厩舎番の残したりリストを見ながら、照合を始めている。

ぎりぎりのタイミングで助かったソルデイスは、ほうつと胸をなでおろし後ろを振り返る。そこでは自分と同じように安堵の表情を浮かべた兄たちがこちらを見ていた。

「時間はあまりないけど、なんとか助かったな」

化粧までされた綺麗な顔立ちに艶やかな黒髪の鬘をつけたサイラスはソルデイスの前までくると手を差し出して馬車の方に導いた。馬車の御者台には下男に変装した妹が楽しそうに手を振っている。

「ルアンリル、着替えないの？」

ずっと王子たちの準備を手伝っていたルアンリルは式典用の精霊族族長の衣装のままだ。

王女がその姿に不安を覚え訊いてみると、ルアンリルは静かに首を振り馬車から離れる。

「私には、精霊族族長として・・・聖司族の頂点に立つ者としてなされなければいけない責務があります。それを放棄することなどできません」

ルアンリルの言葉に王女は泣きそうな顔で助けを求めようと兄たちを見た。

しかし彼らはルアンリルがすべきことを理解しているように悲しそうな顔で承諾している。

「ルアンリル、そっち扉は王都の別の家の方につながっている。仕掛けの扉じゃなく、扉の横にかかっている鍵だけで進めるから」

ソルデイスはそういうと、まだ開いていない扉を指差した。その扉の横には言葉どおりに鍵が掛けてある。

「ここまでついてきてくれてありがとう。無事に、また会おう」

サイラスは短くそういうとルアンリルと握手をして馬車に乗り込んだ。ソルデイスもサイラスと同じようにルアンリルと握手をする。と文句をいいたげにこちらを見ているシェリルファーナの傍へ行く。

最後に残ったクラウドスは、ゆっくりとルアンリルの前に立つと小さいころから一緒にいたその姿を観察した。

ルアンリルが最初登城したのは同じ年であるクラウドスの遊び相手としてだった。

それから月日がたち、それぞれに役目が増えてくると遊び相手の任は解かれ、ルアンリルはソルデイスの教育係に転任となった。それでも二人の間には他の王子たちとは違う心のつながりがある。

ルアンリルは目の前に立つ王子に少しだけ泣きそうな顔で握手を求めた。

彼は差し出された手ごと抱きしめる。

随分と細く感じるようになった。剣の修行に励み、体の発育もいいクラウドスから比べると、ルアンリルは少女のように細く、柔らかいものだった。

「ク、ク、ク、クラウドス王子??」

顔を赤くしながら、自分を抱きしめる王子の名前を呼ぶ。

「絶対に、無事で、生きて再会しよう・・・そして、ルアンの性別がきまったら、結婚しよう」

耳元で囁かれた言葉に、ルアンリルは顔を更に赤くした。

ずっと思いつていることは知っていたが、この場面で告白されるとは思わなかった。それも付き合おうを一足で飛び越え、結婚を申し込まれるなど思ってもみなかった。

「あの・・・私は、男になる可能性もあるんですよ？」

両性具有の体は時期がくれば、性別が決まる。本人の意思である程度は移行できるというが、確立は五分五分なのだ。

「まあ、そのときは、そのときだよ・・・俺はルアンと結婚したいだけだから」

出会って数ヶ月の時からずっと結ばれたいと思っていた相手だ。

その相手がこの戦火の中に戻る前にどうしても確約を得たかった。

「返事は？」

「また、会った時に返します。その時まで、あなたも無事に」

答えはすでに決まっている。

しかしそれはこの場所で伝えてはいけない。

その言葉にクラウドは短く「わかった」と小さく答えて、腕の中からルアンリルを開放する。

ルアンリルは腰につけていた、剣を抜くと自らの背でゆれていた長い三つ編みを掴み、肩口から切り落とした。いつも綺麗に整っていた黒髪が、ルアンリルの肩の上で散らばる。

「これを、お守り代わりに持っていてください」

差し出された髪を、クラウドは一度胸に抱くいた。

ルアンリルの思いを胸に刻み付け、クラウドは最後にルアンリルの頬にキスをして馬車の御者台へと乗り込んだ。馬車の先にはルアンリルに示したのとは違う暗い通路が広がっている。

「それじゃ、また会おう」

「クラウド兄様っ！なんでっ!？」

思いを確かめ合った恋人をこんなところに置いていくなんて、それも戦火の中に戻すなんて、幼い彼女には理解が出来なかった。

「シエリル、ルアンの邪魔をしてはいけない」

ソルデイスはそう言うと泣き叫ぶ妹の体をしっかりと抱きしめて、クラウドに出発の合図を出した。

第二十話：恋人未満の約束（後書き）

この話、唯一のラブシーンです。まだまだ発展途上の恋人たちなので、挨拶のキスマまでしかありません。

ルアンリルがいままで『彼』、ないし『彼女』で敬称しなかったのは、ルアンリル自身の性別がまだ決まっていないからです。同じ両性具有体でもアーシアは性別がいかわるタイプなので彼女と呼びます。（男性体：アルフレッドの時は彼です）

とりあえず、次回から暫くはソルデイス達以外の行動に場面が移ります。

第二十一話：竜姫たちの逃走劇

一方、ソルデイス達と別れたロシキスの王子・王女達はフェルスリユートの導きの元、なんとか城からの脱出を果たしていた。

「よく、人がいないところがわかるもんだ」

まだ兵が配されていない場所や手薄な場所ばかりを、まるで知っているかのように迷いなく進むフェルスリユートに実戦経験もあるレティアは少しながら疑問を覚えた。

ソルデイスの命を狙わなかったし、隣国の姫を逃がすだけの役目の方を選んだ彼が、ディナラーデ卿の手先とは考えにくい、何か特別なものを隠しているようにも思える。

「気配と予兆と能力・・・その三つのおかげですよ、姫さま」

彼はおどけた口調で答えると周りと家の中を確認してから、明かりのついていない屋敷に忍び込む。

人のいる気配の全く感じないその屋敷は一種独特の雰囲気を持っていた。彼は庭の茂みの中に彼らを隠すと辺りを警戒しながら、王子たちに注意する。

「この庭で隠れていてください。その間に俺は変装道具や、その他諸々とつてきます。絶対にこの茂みから出ないでくださいよ」

全員がその言葉に肯いたのを確認するとフェルスリユートは庭から出てどこかへ消えた。

外の喧騒は続いている。未だ、ソルデイス達は見つかっていないのか、兵から兵への申し送りの中に、彼らの名前が飛び交っている。時折通る兵士の足音に肩を竦めながら、三人は静かにフェルスリユートが戻るのを待ちつづけた。

「お待たせしました。これに着替えてください」

フェルスリユートは茂みの中に袋を入れると、代わりにヘンリー王子だけを抱き上げる。どうやら女の子たちは茂みの中で着替えさせ、王子は自分で着替えさせるつもりらしい。

「着方が判らないときはいつてくださいね」

言葉の意味は渡された服を見たときに判った。

袋の中に入っていたのはリディアの南に位置するレナルドバード王国の民族衣装だった。砂漠を有するか国の衣装は珍しく、レティアも数度しか見たことがない。ルミエールに至っては初めて見るものだった。

それでも、レティアは前に本で読んだ記憶を頼りに服を身につけ、途方にくれている義姉の着替えも手伝ってやる。

「最後に、この被り物を・・・これで髪の毛が隠れる」

それは顔を追おう布製の被り物だった。顔の位置する部分は細かい網目状の布になっており、他の部分は厚手の黒い布で出来ている。確か、かの国は女性の顔を見られるのを厭う風習があるため、このようなもので隠すのだろう。それが今は非常に役に立つ。

「それにしても、ここはどこだ？先ほどから外では兵の足音がするのに、この屋敷には一向に踏み込む気配すらない」

内乱が起きているのだ、兵は貴族の屋敷にすべて押し入り、王子達を匿っていないかと家捜ししているはずだ。

「この家の持ち主は今回の首謀者、ディナラーデ卿ですよ。元々この家には侍従みたいなものはいないですし、雇っている兵は城に行っている可能性が高いと踏んだんです。それに王都はすでにディナラーデ卿の軍に押さえられている状況。首謀者の家に、兵が乱入することはないでしょ」

だからこそ、誰が来ても茂みから出るなと言っておいた。兵も中の様子を眺め見ることはしても裏の茂みまで探索することはない。「裏を、斯くという大博打にでたわけだな」

レティアは案外無謀な策を労する彼に少し呆れながらも、その機転に感謝した。

彼は「機転ですよ」と王女の言葉に一応反論してから、ヘンリー王子を茂みの中に入れ、自分も茂みの中に姿を隠した。

「これから、どうするんだ？」

「とりあえず、今、旅芸人たちがいつせいに王都を出ています。それがすむ明日の明け方くらいには逗留している諸外国の大使やその礼状が退去するでしょう。それにまぎれてここを出る予定です」

聞き込みの結果、王都を出て行く旅芸人以外の馬車は今現在止められているらしい。旅芸人たちも占い師や、特殊な芸が出来るものはそれを披露することで脱出の許可が与えられ、それ以外は、足止めを食らっている。

つまり、明日の明け方になるまでは王都脱出は困難となっているということだ。もちろん、

暗い中の方が顔の判別がつきにくいし、潜みやすいので、逃げるのは最適ではあるが、ロシキスの王子王女たちにはこの変装で明るい中を脱出させた方がいだろう。

「ロシキスの王子・王女だとしても殺されることはないと思います。近隣の王侯貴族は適当に捕虜となつて新体制のリディアとの契約を結ばされるといふ噂も流れています。捕まらないように慎重に行きましょう」

もともとリディアにとり脅威的な力を持つロシキスの軍事力が新体制に付かれると、何かとまずい。

せつかく逃がしたソルデイス王子達が王権を取り戻すことが難しくなる。そうならないためにもこの目の前の少年少女たちをフェルスリユートは逃がしきらなければならなかった。

「とりあえず、人が切れたら、この屋敷を抜けて下町にある俺の家に行きます。貴族の家以外は調べないと思うからそちらのほうが安全です」

いつ家人が帰ってくるか判らない屋敷にいるのもまずいし、明るくなってからだとの屋敷を出るときに目立ってしまう。暗いうちにどうにか移動しなければならぬ。

その言葉に、レディアは了解の意を伝えると、外からは見えない位置で剣を取り出しておいた。

見ると荒事には一切なれていない義姉が震える体をなんとか宥め

ながら、立ち上がっていた。その懸命な姿にレティアは優しく笑みをつくり、ルミエールの体を支えるようにしてあげる。

ルミエールはそんな優しさに嬉しそうに目を眇めてみせた。

「それじゃ、行きますか」

フェルスリユートはそう言つと小さな王子を軽々と抱き上げ、異国の服装に身を包んだ王女二人を連れ従いながら、自分の家へと向かつて歩き始めた。

第二十一話：竜姫たちの逃走劇（後書き）

とりあえず、場面が切り替わってロシキスの王族たちにスピノフです。

フェルスリユートはなかなか大胆不敵な行動にでていますが、きちんと射ているようです。

第二十二話：光姫の救出

アルフレッド・アーシアが異変に気づいたのは、内乱が起こって大分たつてからだつた。

城の方が明るいのは式典や宴が続いているのだろうと思つていたのだが、何か雰囲気が違うように感じた。

自分の身柄を確保している衛兵に聞いたところで、明確な答えが返ってくるとは思えない。

けれどもどのようなことが起きているのか知りたくて、彼女は神経を張り巡らせる。

闇が支配する夜ではあまり効果がないが、光があればある程度の能力で彼女は奥宮の外を覗くことができた。

「なに・・・これ？」

見えたのは切り伏せられる人・人・人・・・この奥宮にも彼らは向かって来ようとしている。

「いったい、何が・・・」

今日はソルデイス王子の誕生日前夜の宴で城は祝賀のムードに包まれているのではなかったのか。

しかし今、自分が見たものは到底祝賀祭とはいえないものだった。先ほど見た兵士が奥宮についたのか、建物を囲む塀の向こうから剣戟が聞こえる。やがて断末魔とともに人の倒れる音、長く締められていた外壁のドアが開き、荒々しく息を乱した男達が乱入する。

「ほう、これは、いい女だな」

その中でも一番くらいの高く見える男が、アーシアの姿を見て舌なめずりをした。

暗闇の中でも光り輝く髪・・・王位継承権をもつ彼女の姿は血で興奮した男達には捕食するための餌にしかみえない。

「見事な金髪、王の愛人だな？」

どうやら自分を知らない人物だとわかり、アーシアは少し後じさ

った。

その姿をおびえていると考えた男達は更に追い詰めようと彼女に近づく。

「光よ、炎よ、意思をもつて狼藉者を貫け、光炎の矢」グロウ・フェイド

詠唱とともに、彼女の手からまぶしい光を放つ炎の矢が現れた。それらは狙い澄ませたように、彼女に近づこうとしていた男たちに襲い掛かり、その身を焼く。

「貴様っ！魔術師かっ！！」

仲間を焼き殺された男は憤り、血塗れた剣を構えなおした。

ただ普通の王の愛人ならば適当に陵辱し自ら困ってやろうと思っただが、人を焼き殺せるほどの魔法を一瞬にして出せるほどの魔術師ではそうはいかない。取りあえずは詠唱を行う声と魔方阵を結ぶ手をどうにかしなければならぬ。

「咽喉と指を落として、魔法を仕えなくしてやる」

目の前の女はそうして手に入れても惜しくはないほどの美貌だ。剣の腕に覚えのある男は間合いをもって彼女と対峙する。

理力魔法は詠唱なくしては発動しない。ならばその詠唱が始まる瞬間を狙えばどうにでもなるのだ。

「光の精霊・グロリア」イル・エレメント

彼女は詠唱ではなく、普通に精霊の名前を呼んだ。現れたのは光を纏う上級の精霊。それは彼女が単なる魔術師ではなくそれよりも上級の精霊魔術師であることをしめしていた。

「炎の精霊も、呼びましようか？」

あでやかに微笑む彼女の言葉に、男はかっとなり剣を振り上げた。「そこまです！」

男が踏み出す直前に、鋭い声がかかった。

突然乱入したこげ茶色の髪と同色の瞳を持つ上品な感じの女騎士は素早い動きで剣を抜くと、男の咽喉下にその切っ先を突きつけた。「どういふつもりだ、ルーヴェント卿」

怒りに目をたぎらせている男に、彼女は冷たい視線で答える。

「どついつつもりは、こちらの言葉です。ラングライド卿。この姫がダイナラーデ卿の妹と知つての狼藉か？」

ルーヴェント卿と呼ばれた女性の問いかけに、男はさつと顔色を変えて自分が手に入れようとした女性を再度見た。

然程ダイナラーデ卿と似ているわけではないが、彼女の明るい緑の瞳はウィルフレッドの持つ薄い緑色の瞳に通じるものがある。

「兄を、知っているのですか？」

では今起きている騒動に兄がかかわっているのだろうか。

不思議そうに目を瞬かせる少女にルーヴェント卿と呼ばれた女性は剣を鞘に収め、跪いた。

「挨拶が遅れ、申し訳ありません。私はダイナラーデ卿の配下、ルーヴェント卿の一子アントワーヌと申します。かの君の命によりお迎えに上がりました」

「私は同じくダイナラーデ卿に組するものでラングライド卿カドウーンです」

先ほどの態度とは打って変わって跪き丁寧に挨拶をしたラングライドに呆れながら、彼女も腰を曲げて兄からの使いに挨拶をする。

「ダイナラーデ卿の妹でアルフレッド＝アーシアです。」

いったい外では何が起きているのですか？それに、この宮は王しか入れないはずなのにあなたはどのようにしてここに？」

アーシアの問いに、アントワーヌはにっこり笑う。

「ダイナラーデ卿が反乱を起こしました。アーシア姫・・・あなたは、もう自由の身なのです」

その言葉にアーシアは眉を顰めた。

何を、今更、そんなことを起こしたのだろうか。

自分が無理矢理ここに連れてこられてすでに6年の月日が流れている。

その間、恋人と引き離された苦しみと実の叔父に襲われそうになる恐怖を相手にずっと一人で戦ってきた。

常に女性体でいるのは、あの男が来たときにすぐに女である『ア

「シア」から男である『アルフレッド』に変われるようにするため。自分で戦うしか、自分で自分の身を守るしかなかった。誰も自分を助けはくれないと諦めていた。

その生活の中に現れた光明は憎悪の対象でしかない男の息子だった。

優しい王子は、自分を開放してくれると約束してくれた。

それと並行するように、自分の恋人がここにいることを見つけてくれた。王の目を盗んでの2人との度重なる逢瀬はこの6年の中で唯一の安らぎの記憶であった。

優しい思い出の中で、彼女の頭の中に不吉な言葉がよぎった。

「王子・・・たちは？」

自分が王として認められた王子。彼はどうしたのだろう。

明日、やっと王冠をその身に抱くことになる予定だった王子は。

「ソルデイス王子たちは未だ見つかっておりません。ですが目立つ容姿の王子たちですからね。すぐ見つかるでしょう」

いきまいて答えたのはカドウィンだった。

アーシアの心情など読みもせず、王子たちの捕捉や処刑を望んでいると思っっている彼は「なんでしたら俺がその首をとってきますよ」と宣言している。

「兄に、会います。今、あの人は、どこにいます？」

王子を殺すなどともつての他だった。

アーシアは未だ媚び諂っているカドウィンを無視し、アントワーヌに問い掛けた。彼女は恭しく礼をすると優雅に立ち上がり、少女の手を引いて王の間へと向かったのだった。

第二十二話：光姫の救出（後書き）

アーシアは両性具有体です。今まで女性として叔父に教われなかったのは、光の魔法で動向を探り、くる直前に男性体になっていたからです。

次回は光姫 vs 反逆者・・・の兄弟喧嘩です

第二十三話：聖長としての役目

王子達と別れた後、ルアンリルは馬車の消えた扉と王宮から通じていた扉を閉めた。ついで自分たちがいた痕跡も綺麗に消してから教えられた通路へと入った。

少しだけ地下になっているそこは先ほど通ってきた通路とは異なり、わずかな距離で出口に辿り着いた。

外の音と気配を確認しながら扉を開けると、そこは城壁の近くの通路の一角だった。偶然にも誰にも見つからない状態で出られたことに感謝しながら、ルアンリルは急いで隠し扉を閉める。閉められた扉は、そこに通路があるとは思えないぐらい自然に壁面の一部と同化した。

周りの景色から、ここから城に戻るのにそれほど距離はないと判る。

ルアンリルは自分の腰に携えた剣を抜くと、短く詠唱をした。

「炎の精霊よ、剣に宿り我に力を貸せファイアソード炎剣」

途端、手にもった刀身に熱が宿る。自分の魔法に誘われるように現れ、体に纏わりつく炎の精霊にルアンリルは目を細めた。

「さあ、炎の柱でもあげましょうか」

こちらで騒動が起これば、検問の人数は減る。その分だけ王子たちの脱出が容易くなるはずだ。

城のそこかしこで起きている火の手のおかげで集めようと思わなくても炎の精霊は自分の元へ来てくれる。

物陰に隠れ、息を潜めながらもルアンリルは城壁の門の一つへと突進した。

突然現れたルアンリルに兵士たちが色めき立つ。だがその誰もが声を出せないうちに、ルアンリルは精霊たちの力を借りて炎の柱を上げた。

断末魔と共に黒焦げになる彼らを横目に見ながら、他から集まっ

てきた兵士たちを炎の宿った剣で切り伏せる。ルアンリルが剣を揮い、指先で精霊に指示を与えるたびに山のような死体が出来上がっていった。

「貴様あつ！」

兵たちの後ろの方から喚くような声がした。見ると明らかに傭兵と思しき人物がこちらを睨んでいた。

「聖長、ルアンリル、フィーナ・エディン。精霊族の族長として、王家に反逆の旗を翻した我が一族のウィルフレッドを討ち取りにきた」

口上を述べる若き魔法使いに兵達は少し後じさった。

魔法力では随一の能力を有しているとして、若くして聖長の地位についた魔法使いの名は国中で有名だった。

バルガス王と折り合いが悪かったせいであまり表舞台に立つことは少なかったが、以前、腕試しに広大な野原を一瞬にして炎で包みその後、また大地を復活させたその能力は誰もが認めるところだった。

じりじりと間合いを詰めてくるルアンリルに傭兵も、兵士も、どう対処してよいか迷う。何かの僅かの揺らぎで崩れそうな緊張感が辺りを支配する。

「やあ、ルフィーナ……」

一人対他人数の均衡を破ったのは、どこか落ち着いた声だった。

いつの間に現れたのか、並居る兵の一番後ろからウィルフレッドはその姿を見せる。

いつも通りに穏やかに自分の愛称を呼び手を振る姿は、謀反を企てた人物とは思えない。だが彼は先ほど、ソルデイス王子に対して反逆を宣言した。

それは世界の秩序を……王国の安寧を守る聖長として許せないものだった。

「デインラーデ卿……あなたには失望した。ソルデイス王子に反旗を翻すなどと、よくも出来たものだな」

ルアンリルの怒りに呼応して炎の精霊が数を増やし、増大させている。剣に宿っていた炎が、勢いを増し、紅い光を放った。

「・・・従妹殿の機嫌は悪いようだ。死にたくなかったら、さがっている」

ウィルフレッドは自分の前にいた兵士達を下がらせると、自らも腰に携えた剣を抜いた。

黒い刀身が闇の中で怪しく光る。彼の周りにはいつの間にも集まったのか、闇の精霊が妖艶に微笑んでいた。

二人の周りには二種類の精霊達がひしめき合い、近寄ろうとするものを焼き尽くし闇へと誘う。

「ルフィーナ・・・忘れていたようだが、私は王族だよ。それに鏡の向こうで聞いていただろう。王位継承のための『見透かす心』も引き継いでいる・・・今まで大人しくしていたのは今日と言う日のための布石だ」

闇の精霊と同じように怪しげな雰囲気を放つその笑みは、今までルアンリルが見たことのない彼の表情だった。竦む体に入合を入れつつ、彼との間合いを詰めてゆく。

魔術師たちの意思に反応して、精霊達は互いに攻撃しあい弱いものが次々と霧散する。

「それでも、正当なる王位継承者はソルデイス王子しかいない」

「やれやれ、^{ルフィーナ}従妹殿も頭が固い」

いきり立つルアンリルとの絶妙な間合いをしつかりと保ち、彼はすうっと切っ先を動かす。それと同時に闇の精霊がルアンリルに向かって襲い掛かった。

多大な攻撃力を秘めた精霊の指先をルアンリルが寸でるところで交わすと、今度は上級の炎の精霊が逆にウィルフレッドに襲いかかった。

「水の精霊・アクアフィード」

いつの間にも呼び出していたのか、水の上級精霊がルアンリルから送り出された炎をかき消そうとし、互いに消えてゆく。

「単調な攻撃だな。だが威力だけは強いようだ」

ウィルフレッドはそれだけを言って、一気に間合いを詰めた。剣の届く範囲に入ってきた彼にルアンリルは逆に離れるように間合いを引いた。

剣の腕では勝てる見込みがないことは知っている。だからこそ精霊魔法や理力魔法でけりをつけようと思っていた。

逃げを打つルアンリルを許さないように、ウィルフレッドは軽やかな足取りで間合いを詰め剣を振り下ろす。

鋭い剣戟があたりに響く。力に押されながらも、何とか交わしながらルアンリルは活路を見出そうといろいろと考えていた。

しかしそのどれもが現実的には無理そうに感じてしまう。

ルアンリルは炎の精霊を呼び戻しながら、自身と剣の周りに炎を作らせる。そして今度はルアンリルの方からウィルフレッドの間合いへと飛び込んだ。

「覚悟っ！」

炎を身に纏い、全方向からの攻撃にした彼女は初めて、剣を振り上げた。

ウィルフレッドが意表を突かれたよう目を見開き、対応しようとしたその時だった。

「ぐうっ！」

剣は振り下ろされず、炎を身に纏ったままのルアンリルがその場に倒れた。

その背には右肩の部分に矢が刺さっている。

矢の飛んできた方向を見ると王の間で別れたオーランド卿が得意そうにこちらをみていた。彼は自分の配下の弓を奪い取り、まるで自分の手柄のようにしている。

「ひ……きよ……な」

恨めしげに睨みあげてくるルアンリルの体を、彼はそつと抱き起こすとその矢を引き抜いた。それと同時に止血と治癒の魔法をかける。

矢を抜く衝撃で意識を失った体を静かに抱き上げると、ウィルフレッドは小さく「すまない」とその耳元に呟く。そして今度は冷たい視線でオーランド卿の方を見た。

「興を削ぐような真似をしてくれたな」

喜んでいた彼は冷や水を浴びたように、おどおどとした目で周りを見た。彼らの一騎打ちを見ていた他の兵士達も無粋なオーランド卿に冷たい視線を送っている。

ウィルフレッドはそれ以上言葉を継ぐ事もなく、思ったよりも小さな従妹弟の体を抱えたまま王の間に戻っていった。

第二十三話・聖長としての役目（後書き）

ルアンリルvsウィルフレッドでした。

ウィルフレッドが反則的な横槍で勝ちましたが、横槍を入れた人間の未来は明るくないでしょう。ウィルフレッドは剣も精霊魔法も上位の魔法剣士です。理力魔法ではルアンリルに少し劣りますが精霊魔法では同等、剣術だけなら凌駕するほど強いです。

第二十四話：光姫の嘆き

アントワーヌに連れられて王の間についたアーシアだったが、兄の姿は王の間にはなかった。

この部屋で待つようにと申し付けられた彼女はそこに王子たちの痕跡や、彼らを救うための手立てがないか探り始めた。

（大きな、姿見・・・）

豪華ではあるがどこかこの部屋に似つかわしくないそれは、何かの抜け穴かもしれない。暖炉の中に転がる生首は誰の物なのだろうか。そしてバルガス王の肖像を切ったのは・・・。

外は相変わらず騒がしく、所々で大きな炎が上がっている。

精霊達が騒いでいるのは魔法を使って戦いが行われているせいなのだろう。炎の精霊と夜を支配する闇の精霊の力が先ほどから増している。

（兄様が、戦っている？）

こんなに強い闇の精霊を呼べるのは、今のところ兄・ウィルフレッドだけだ。そして炎の精霊を呼べるのは・・・

（兄様がルアンリルと戦っている？）

従兄弟同士の戦いがこの城のどこかで行われている。

自分達以外で自分たちに近いところ^{きょうだい}にいたルアンリルはアーシアが捕まった以降、何とか彼女を助け出すための努力をしてくれた人だ。そのせいで精霊族と王との確執が深まったとも言われている。

そんなルアンリルと兄がどうして戦っているのだろうか。

考えている間に、ふうつと精霊の力が弱まった。

いや、弱くなったのは炎の精霊のみ・・・闇の精霊は未だ強い力を放っている。

それが意味することにアーシアは恐怖した。

彼女は近くの椅子に腰をかけると、震える手を胸に抱きしめた。

いったい何が起きているのだろうか。あの優しい王子は無事にいる

のだろうか。

ぎゅっと目を閉じて、悪い考えを追い出そうとしてみるのだが、どうしてもいやな考えのみが頭を支配してゆく。

暫くそうしていると騒がしい足音がこちらに近づいてきた。顔を上げるとルアンリルを胸に抱えたウィルフレッドと、何とか弁明を謀ろうとするオーランド卿の姿が視界に入った。

王の間の入り口に控えていたアントワーヌが一礼をすると、ウィルフレッドは胸に抱えていたルアンリルを彼女の前に横たえる。

「治癒魔法はかけてある。出来る範囲で手当てをして魔術師専用の牢に入れておけ」

アントワーヌは短く「はい」と答えると隣室で震えていた侍従二人に担架の準備をさせる。

「殺さなくて、よいのですか？」

ウィルフレッドの決断に驚いているオーランド卿は思わず、そう主に尋ねてしまった。その質問にウィルフレッドは先ほどよりもっと冷たい視線を彼に送る。

「ルアンリル」フィーナは間違いなく、王子たちが城を脱出するまで同行していたはずだ。そして無事を確認してから役目のためにこちらに来たと考えられる」

「はぁ・・・」

それでもその生かしておくことの重要性が判らない彼に、アントワーヌは溜息をつき、アジアはそんな人物を配している兄に冷たい視線を送る。

「つまり、あなたは、ご自分の従妹弟に尋問をされるのですね」

冷やかな言葉を発したアジアにウィルフレッドは何を判りきった事をとでも言いたげに笑う。

急に言葉を発せられて、初めて彼女の存在に気づいたオーランドはその少女の美しさに息を飲んだ。

抜きん出た美しさを誇るバルガス王妃を筆頭に王の愛妾の容姿の美しさは有名ではあったが、この少女の美しさは並では語れないほ

ど圧倒的であった。

たゆたう様に流れ落ちる黄金の髪、木漏れ日を集めたような美しく明るい緑の瞳、目鼻立ちははっきりとしているが、きつさは一片たりとも感じさせない。

この美しさならウィルフレッドも籠絡されるのではと思い、主人の顔を見てみると彼は苦虫を噛み潰したような顔をして彼女を見ていた。

「お前が、口を出すことではない」

「兄様が世の理ことわりに反するようなことをしているのであれば、進言し止めるのが兄弟としての役目です」

歯切れの悪い兄の言葉にアーシアの怒りは更に増した。

何よりも自分が王と決めた王子に対して兄が何をしようとしているのかを考えるだけで許しがたい。

しかしウィルフレッドはアーシアの怒りに取り合おうとはしなかった。

「世の理ことわりなどバルガスが王に就いた時点で消えている」

と、冷たく言い放ちアントワーヌに早くルアンリルを牢へ連れて行くように指示をする。

彼女も心得ているのか持ってきた担架へと慎重に聖長の身体を乗せると最敬礼をして王の間を辞した。

「王位継承の証を何一つ持たない王に比べれば、兄弟で分け合っているとはいえ二つとも揃っている我がらが継ぐほうが理にかなっているだろう」

兄の言葉が信じられなかった。誰よりも世の中の理ことわりを重んじていたはずの彼にいったい何があったのだろうかと訝しんでしまう。

「我々みたいに欠けている者よりももっと正統な者がおりましょう」
暗にソルデイス王子の存在を匂わせて言うと、彼は含んだ笑みで静かに首を振る。

その意味が読み取れずにいると、ウィルフレッドはそこで会話を打ち切り踵を返して部屋を出て行ってしまった。変わりに控えの間

から数人の侍女が来て、適当な部屋へと案内するといわれた。

アーシアは怒りと悲しみをどこに持っていけばいいのかわからな
いまま、とりあえず侍女に従い部屋を移動したのだった。

第二十四話：光姫の嘆き（後書き）

今度は、アーシアvsウィルフレッドの兄弟喧嘩です。

前回の話より前にこの話を書きかけたのですが、途中で時間経過の関係上、この話が後になると判明し、こちらが第24部となりました。

第二十五話：旅芸人たちの脱出

馬車が通れるほどの大きな隠し通路を抜けた先には木製の扉があった。

外の気配を確認しつつ、ソルデイスが開けるとそこは外壁に近い路地の一角だった。建物に囲まれ、こちら側に向く窓もドアもないその路地に馬車を出し、外側から扉を閉めるとそこは何の変哲もない石壁へと変化した。

そこから今度は少しだけ賑わいのある通りに出て、沢山の馬車が連なる中へと紛れ込んだ。

周りは旅芸人たちしかいないせいか、踊子たちの使う易い白粉の匂いや暇を持て余した楽師たちが楽器を爪弾く音がしている。

「占い師のいる一座は先に出られるってよ」

どこかで噂している声が聞こえた。確かに過去見・予知見・星見みと呼ばれる時守の一族に準ずる占い師は、その特別な能力ゆえに判別がつきやすい。

「占い師がいない一座は明日の朝また来いって言われるらしい」

その言葉に周りから「なんでえ？」とか「困るよお」という甘い声が聞こえた。美しい体を誇る踊子たちはこういう戦場で自分の身体が傷つく事態を嫌がる。

ソルデイスはその中の一団に目をつけると、その座長らしき女に声をかけた。

「私たちを、あなた的一座に入れてくれませんか？」

急な申し出に恰幅のいい女性が目を見開く。

「私は占い師なんです、一座の人数が少ないせいで目をつけられかねない状態なんです。とくにお姉様がとても綺麗だから・・・入ってくる時も役人に難癖つけて浚われそうになって・・・だからお願いです一緒に行ってくれませんか？」

確かに目の前の黒髪の少女は占い師の格好をしている。馬車の荷

台にいる女性も少女が言う通り稀にも見ないぐらいの美人だ。その女性二人を守るように座っている男は女性の恋人かとも思ったが、少し顔立ちが似ているから血族かもしれない。

「わかったよ、こつちとしても有り難い申し出だ。うちは踊り子が多い一座だからね。こんな所で商売道具に傷がつくなんて困っちゃう所だったんだよ」

「ありがとう」

ソルデイスは華が綻ぶような笑みで礼を言うと馬車の荷台に戻った。

「お前、役者だな」

クラウスが弟の演技力に感心すると、彼はにっこり笑って「慣れるからね」と返す。

占い師を得たことで一座は検問を行っている門へ向かって進み始めた。その中ほどに位置するようにクラウスの馬車もついてゆく。

検閲の順番が回ってきたところでソルデイスは一人馬車から降り、先ほどの女性と共に官吏の傍へと行った。

「この子がうちの占い師だよ」

「リル・ソリユードと申します」

優雅な礼をした美しい少女に官吏が少し顔を赤らめる。

しかしソルデイスの名乗った名前を聞いて検閲側の時守の一族の者がざわめいた。

「何事だっ！」

「いや、別に……」

ざわめいていた一人が言葉を濁した。

だが別の男は立ち上がるとソルデイスの前に立った。突然の状況を見ていた女主人を他所に、男はソルデイスの前に跪きその手にキスをした。

そして立ち上がると官吏に向かい

「この方は我ら時の一族でも高位に入る方だ。検閲するにしても丁寧に対応してください」

と忠告した。

男の言葉に準じるように他の時の一族たちも肯いている。

「ありがとう、予知見さきみの方」

ソルデイスは自分の横に守るように立つ男に感謝を述べると官吏の傍に移動する。

「何をすればよいのでしょうか？」

時守の一族の忠告に少々毒気を抜かれた彼は少女をつれて占い師たちの検閲の場所まで連れて行った。そこには布をかぶせられた5個ほどの遺体があった。

「この者たちの名前と彼らの情報をあなたが見た分だけ書き、こちらの兵士に渡してください」

官吏の言葉に（これじゃ予知見さきみは通れないな）とソルデイスは思いつながら、示された遺体の情報を書類に書き込む。

それを役人に渡すと彼は用意してあった書類と書かれた紙を付き合わせた。

「これは、すごいまままで占い師の中で一番の成果だよ」

若い役人は目の前のストイックな感じを纏う占い師の少女を絶賛した。

その声を聞いた座長はほうつと胸を撫で下ろす。占い師とは名乗っていたが、どれほどの能力があるのかは疑問視していたのだ。

逆に官吏のほうは先ほどの男たちの態度を思い出し、少女に畏敬の視線を送る。

「デイナーデー卿の配下として迎え入れたいぐらいだが・・・」

「我々時守の一族は政治には関わらない事を宣言しております」

少女の冷静な言葉に官吏も役人も「もったいないが、しかたない」という表情で通関許可書にサインを書き入れる。

座長はほくほくの笑顔でそれを貰うとソルデイスの方を抱きながら一座のいる馬車隊に戻った。そこでは一応、馬車内部の人員のチェックが行われていた。

この大人数の集団に対して役人の数が少ないのは先ほどから王城

の辺りで上がっている大きな火柱のせいかもしれない。

ソルデイスが役人たちの行動に視線を向けると、いきりたった役人が自分の馬車の後ろでなにやら文句をつけていた。

「なにをやってるんだい？」

それを見咎めた座長が声をかけると役人は顔を赤らめながらごちよごちよと文句を言っている。

「その役人は馬車の楽師に惚れたんだつてえ」

「自分の裁量でうちらのこと通してやるから、お前だけ残れつて言つてんのよ」

自分たちにはまったく目もくれず楽師にだけ口説きを入れた役人が気に入らないのか踊り子たちが口々に女に報告する。

彼女は自分が先ほど貰った通関証を広げると、

「ほら、これがうちの通関証だよ！あんたの役目は終わったはずだ。さつさと他の一座の人員でも確認しておいでっ」

恰幅の言い女座長の一喝に男は顔を赤らめて剣を抜こうとしたが、騒ぎを聞きつけた他の役人や官吏に取り押さえられた。

最後に責任者らしき男が座長である女に謝り、その場は収まった。

「さあ、変な輩がまたちよっかいかけてこないうちに行くよ」

彼女の掛け声と共に一座が動き出す。ソルデイスも自分の馬車に身軽な動きで飛び乗ると、心配そうな顔で待っていた兄妹たちに親指を立てて見せた。

第二十五話：旅芸人たちの脱出（後書き）

今回は第24話と同時にupです。

王子たちの脱出と竜王国の王女たちの脱出が終われば取りあえず王都脱出編は終了。そして王国迷走編が開始されます。

第二十六話：向かうべき場所へ

一座が王都を囲む城壁を抜けると街道を埋め尽くすように雑多の兵が兵營を気づいていた。

座長は辟易としながらも、街道に複数設けられた通関を先ほどの書類で抜けてゆく。

高位の占い師を持つ一座と記されているのか、大方の通関では殆ど積荷や人のチェック無しに馬車は通過してゆく。

時々、人をチエツクする関所では、他の関所同様、美しい占い師の少女に扮したソルデイスや、それに劣らず清廉な美しさを誇るサイラスの二人に心奪われる役人がおり、女座長は苦笑を禁じえなかった。

すべての通関を通り過ぎ頃には空はすっかり明けきり、宵つ張りの踊り子たちも疲れたのか静かに眠ってしまった。

「ありがとう、ね。あなたのおかげで一座が無事に通れたよ」

兵たちの姿も遠くなったところで一端馬車を止め、座長の女はにこやかな笑みを浮かべながら、ソルデイス達に近づいてきた。

「いえ、私たちこそ助かりました」

にっこりと笑う占い師の少女に座長は口をゆがめた。

「女の子の真似はもういいよ、ソルデイス王子」

途端にソルデイスの瞳から笑みが消える。そんな表情を観察しつつ、女は王国内に伝わっていた『何も悩みがなくいつも笑っている馬鹿な王子』という認識を払拭する。

これは食えない。並みの大人なら顔負けするほどの曲者だ。

「どこでわかりました？」

冷たい声で聴いてくる王子に、女は自分の守るべき一座の馬車を指差す。

「こんだけの一座をまとめる女だよ。一度でも見た顔を忘れるもんかい。」

その綺麗な姉ちゃんはサイラス王子、顔を黒く塗っているのはクラウス王子、そしてこっちのおちびちゃんはシェリルファーナ姫だろっ?」

言い当てられたクラウスとサイラスは顔を陰しくした。自分の身のことなどよりも、ソルデイスを守らなければならない使命を彼らはしっかりと感じていた。

逆に起きていた踊り子たちは自分よりももてていた楽師が男と知り、俄然、色目を使い出す。

踊子にとり綺麗な男の種を貰うことは一座を続ける上で重要なことだった。綺麗な男の子供なら綺麗な子供になる。そうすれば踊子としてもその他の意味でも重宝するからだ。

「いまから戻って兵に突き出しますか?」

少し顔を青くさせて聞いてくるサイラスに女は目を見開き、豪快に笑った。

「せっかく通れたのかい?ばかばかしい。そんな無駄はうちらはしないさ」

ただでなくても折角の祝辞・・・稼ぎ時であった祭りを壊したことを快く思えるはずもない。

バルガス王という男の治世がやっと終わり、これからは伸びやかに商売ができると思ったのに、内乱なんぞが起こってしまったては安心して祭りに参加することもできやしない。その意味も含めて、彼女は彼らを突き出す考えなどなかった。

腹を抱えて笑う彼女に毒気を抜かれたクラウスとサイラスはソルデイスに視線を投げかける。彼は元からこういう旅芸人たちの気質を知っているかのように、余り驚いた様子も見せていない。

「それじゃ、旅の行程はこの子と話し合うから、あんたらは今のうちに休んでおいてくれよ」

女座長に肩を抱かれ引き摺るように連れて行かれるソルデイスは、心配をしている二人の兄に笑顔で手を振ってみせた。

馬車から少し離れたところで女は足を止めた。

短い草の多い草原は、周りに人が来ても判るために内緒話には丁度いい。

とりあえずリディア国内の地図を広げると、彼女は関係ない話をソルデイスに切り出してきた。

「それにしても、どうやったんだい？さっきの占いは。リディアの王位を継ぐものは心が読めると聞いたが、そんな力じゃあの占いはできない」

確信を持って訊いてくる彼女に逆にソルデイスが訊き返した。

「役人の心を読んだだけとは考えないの？」

「ああ、あたいもそう思うのかと思っただけ、あれは無理だ。死体は占い師ごとに違うものが宛てられたと言っし、役人は死体の内容を知らないから書類で答えあわせをしていたんだよ」

つまりあの場にいたどの役人の心を読んだところで答えなどわかるはずがないのだ。関所を築いたディナラーデ卿の知能の高さともいえる。

だが目の前の王子はウィルフレッドが知る以上の能力を隠し持っていた。だからこそあの関所は意味を失い、彼らはここに脱出することができた。

「父が僕のこと人に隠れてなんて言っていたか知っていますか？」
いろいろと考えている女に向かって、彼は寂しそうに視線を向けた。その顔は今にも泣きそうな顔に見える。

「『人の皮を被った化け物』、『過去を穿ほじくり返す人非人』」
実の息子に……いやどんな子供に対しても言っていない言葉ではない。

現に壊れそうな瞳の王子は辛そうな顔のまま笑おうとする。

「『人の運命を弄ぶ悪魔』……『騒乱の星を持つ呪われた子供』」

ずっと言われ続けていた言葉を繰り返す唇は震えている。瞳にはこらえられない涙が浮かんでいる。

それなのに彼はずっと笑おうとしていた。

ソルデイスが笑うことで自分を守り、周りを守ってきたのだと彼女は確信した。

数多の呪いの言葉を自分だけの胸に仕舞い、兄弟の誰にも気づかせずに彼はずっと過ごしてきた事を察することはあまりにも容易かった。

「もういいよ。あんたがどんな力を持っているのかは大体理解できた」

ソルデイスの言葉を止める形で女は地面に広げた地図をパンと叩いた。

「さてこれから本題に入ろうか」

彼は見ず知らずの女性にこんな思いを吐露してしまったことを恥じながら、呪いの言葉を忘れるためにも違う話に耳を傾ける。

「あんたはどこへ行きたい？ うちらは借りたまんまは嫌いなんでね、途中まで連れてってやるよ」

「借りなんて、僕らだってあなた方を利用したんだからチャラです有り難い申し出だったが、これ以上の同行は迷惑になる事は重々弁えていた。」

しかし彼女は隣に座るソルデイスの背中をバンバンと叩き、にかつと笑って見せた。

「いんや、あんたからの借りの分が多すぎるんだよ」

ソルデイスに伝わってくる彼女の心からも同じ思いが伝わってくる。そのずれのない朗らかさが、彼にはありがたかった。

「それでは時守ときもりの里のそばまでお願いします」

ようやく行き先を決めてくれた王子に彼女は大きく肯くと地面に広げた地図を折りたたみ脇に抱えた。それから汚れた手を自分のスカートで拭くと王子の前に差し出した。

「それじゃ、改めて。この一座を取り仕切るグランテ・ガーバリイ。」

みんなにはグランマと呼ばれている」

「リディア神王国王子ソルデイス・エンデドルグ・リグア・エリフアイドです。よろしくお願ひします。レディ・グランマ」

ソルデイスは差し出された手をしっかりと握り握手をする。その顔は最初出会ったときにしてしていた作り物みたいな顔よりもずっと綺麗に見えた。

「そんじゃルートはあとであの苦労知らずの剣士の王子に話しておく。あんたはさっさと眠っちまいな」

脇に抱えた地図を叩きながら、去っていくグランテにソルデイスは久しぶりに本当の意味で笑った。

第二十六話：向かうべき場所へ（後書き）

これでソルデイス達の脱出も終わり、後一話、竜王国の王女たち等の動向を書けば王都脱出編が終わります。

伏線をもう少し複雑に絡めておいて、終わり次第始める話の方に行きたいです。

第二十七話：それぞれの脱出

フェルスリユートの家で仮眠を済ませた竜王国の三姉弟は簡単な食事の後、変装のための衣装を見に纏う。

こういうときに南国の衣装は役に立つ。髪の毛を他人に見られることを極端に嫌いうため男はすべての髪を布の中にしまうことが常となっているし、持ち物である女の顔を見られないために女性の頭部はすべてが隠れるような布で覆われる。

確かめようにも自国の女性か他の国の王族の前でしかそれを外すことは許されておらず、もしそれが違えられた場合には顔を見られた女性は命を失う羽目になる。特に高位の女性は母親や姉妹と夫となる者以外には顔を見られてはならないというしきたりになっているため、殆どチエックなしに関所を通ることができる。

ヘンリーの格好はレナルドバードでは珍しくない外国人の下男というところだろう。それでも髪が隠れ、肌の色をつけるだけで、見事な変化となる。

最後にフェルスリユートが衣装を纏う。彼は着慣れているのか手早く服装を整えると日焼けした肌の色を増す処理を施す。ついでに首にはじゃらじゃらと首飾りをかけ始めた。

「それはレナルドバードの貴族の衣装じゃないだろう」
レティアが指摘すると彼はにやりと笑って見せた。

「これはあの国の占い師の格好です。下男はこれ以上増やせないというんでね。とりあえず、昨日のうちにあの国の貴族の一人に話をつけておきましたんで、そこに合流しましょう」

いつの間には思ったが、自分たちの衣装を借りてくる時にでもお願いしたのだろう。

大陸の比較的北に位置するロシキスではあるが、レナルドバードとは頻繁に貿易があり、仲も悪くはない。もしかしたらその辺りで恩を売ろうとしているのかもしれない。

レティアは瞬時にそこまで考えを巡らした。王女の考えを見抜いているのか、フェルスリユートは降参したとばかりに掌を広げてみせた。

通りは脱出しようとする馬車でごった返していた。

その中で目的の馬車を見つけたフェルスリユートはヘンリーを抱っこしたまま足早に近づく。

来訪を馬車の周りにいる兵隊に告げると、豪奢な馬車の一つから恰幅のいい男が現れた。

レティアはその顔に見覚えがあった。レナルドバードでも有力な貴族の一人なのだが、本人は気のいいおじさんという人物だ。確かアブシャリード候と呼ばれていたはずだ。

「すみませんが、これが脱出させる子供たちです。俺も含めてお願いします」

「いやいや、私も助かるところだよ」

どうやら自分たち以外のところで何かの取引が行われているようだ。レティアは彼らの会話から読み取った。

「すまないが、君たちは私の第3夫人・第4夫人という形で馬車に乗っていてくれ。そこが妻と娘たちの馬車だ。君は、私の隣に座り下男の格好で・・・それからガジエツト卿、頼みますよ」

てきぱきと指示を出すアブシャリードに従い、レティア達は連れ立って示された馬車に乗った。そこには自分と同じ格好をした女性たちが5人ほどすでに乗っていた。

「夫から話は聞いております。私は第一夫人のジャスミン、こちらが第二夫人のカレーナです。しばらくの間ですが仲良くしましょうね。レティア王女、ルミエール王女」

事情を把握している夫人たちは暖かく王女たちを迎え入れてくれた。この分だと候の馬車に乗ったヘンリーもさほど悪い待遇は受け

ていないと推察する。

「は、はい。ありがとうございます」

「ありがとうございます。レディ・ジャスミン、レディ・カレーナ。我々のことは暫く、レーラとルシエラとお呼びください」

ロスキス独特の名前はまずいと、レティアはとっさに二人分の偽名を伝える。

聴いている二人も弁えたもので「レーラとルシエラ・・・姉妹で夫人になったことにしましょ」と設定を決めている。

「それにしても、あなた方は運がよかったですわね」

第二夫人の方がレティアとルミエールに微笑む。といつても顔は見えないから雰囲気だけしか伝わってこない。

「運がいい？」

「ええ、ガジエット卿はわが国では有名な占い師ですよ。そんな方に付き添われての脱出なんて、天の配剤ともいえる強運ですわ」

はしゃいでいる夫人二人をよそに、レティアは考え込む。

本当に偶然なのだろうか、それとも彼が選んだのか・・・

「旅の一座たちも占い師がいるという者たちだけ先に通れたそうですよ」

ソルデイス達もその中に紛れ込み逃げることは出来たのだろうか。レナルドバード特性の女性専用馬車では外の様子が知れないが、少し進んでは止まり、少し進んでは止まりを繰り返している。

やがてドアが開き、中を確認するようにリディアの鎧を纏った兵と役人が乗り込んだ。

役人は女性で発せられた声が女性のみと判断すると馬車を出るように兵に促した。彼は少し不満そうだったが、自分のせいで女性たちが死ぬ羽目になってもいいのかという言葉に渋々馬車を出て行った。

足音が遠のき、ほうつと息を吐くと同時に馬車が動き出した。どうやら無事に通過できたようだ。

「ソルデイス様たちも、無事に通れたのかしら・・・」

「通れたんだらうな。じゃなきゃ女性だけの馬車にまで乗り込んできて調べないだらうから」

きつと、あの器用な王子のことだ。適当に占い師のいる一座に潜り込んで脱出しているだらうとレティアは信じていた。

「それよりも、ここから先ですよ義姉上。どうやって私たちが国に戻るかを考えなくては・・・」

街道の分岐に出れば、アブシャリード達とは別れることになる。

彼に国まで送って貰うわけにはいかないし、そんなことをすれば逆に目立ってしまう。

とにかくこの先は改めてフェルスリユートを含めた4人でまた道を切り開かねばならない。

ロシキスの王位継承権を持つヘンリーだけでも絶対に故国へ連れて帰る。レティアはより一層の硬い覚悟を決め、先の見えない旅路に思いをはせた。

山の中腹を過ぎた頃に空は明るくなり始めた。

「先を急ぎましょう陛下」

側近の一人が焦りを含みながらも恭しく言葉^{せうご}を発する。バルガスは忌々しそうに舌を打ち、また歩きはじめた。

なぜ、王である自分がこんな山の中を歩かなければならないのか。あの時、自分が張った罫にルアンリル・・・そして、本命のソルデイスがかかるのを待つだけだった。そうすれば自分の王位はまた5年、長ければ自分が死ぬまで保たれるはずだったのだ。

それなのに、腑抜けのウィルフレッドが急に戦を起こした。それだけではない自分が権力も武力も奪ったはずの相手はもちろん、自分が子飼いでいたはずの貴族までもが牙を向いた。

「妃殿下はご無事でしょうか・・・」

侍従の一人が心配そうにかなり遠くなった城を見下ろして言った。

バルガスは馬鹿にするように鼻をならし、

「ディナラーデ卿も昔なじみの女を殺すような真似はしないだろうよ」

あの男が自分と知り合う前、王妃と懇意な関係にあったことは知っていた。

だからこそバルガスはソルデイスと共にサイラスの存在も疑ってはいた。彼にとり自分の子供だと本当に認識できるのはクラウスとシエリルファーナのみだ。本来なら自分に必要のない後の2人のうちサイラスだけを傍に置き、王位継承の矢面に立たせたのは互いに倒れてもらったためだった。

しかしあの王子は^{サイラス}どれだけの事をやらせてみても、ソルデイスとの対決だけはしなかった。

「そういう腑抜けな部分はディナラーデ卿に通ずる通ずるようにも思えるが・・・」

バルガスの呟きに回りにいた人間たちが首をかしげるが、彼はそれに気づくことはなくまた険しい山へと一步踏み出した。

第二十七話：それぞれの脱出（後書き）

この話とエピローグで王都脱出編は終わりです。
またすぐに続編が始まりますのでそちらもよろしくお願ひします。

エピローグ：そして、旅の始まり

ソルデイスが目覚ますと、馬車はいつものまにか動いていた。どのぐらいの距離を進んだのだろう。ほろのついた馬車では周りを見る事ができない。

御者台の方からは兄二人の声が聞こえる。踊り子たちの猛攻に辟易としているサイラスが馬車の中からクラウスと話しているらしい。時々、その声に笑いが混じっている。

暖かさに顔を下に向けると自分の腕にしがみつくようにしてシエリルファーナが寝息を立てていた。

（こういうぬくもりは・・・初めてだな）

父に自分が不義の子であると思われてから・・・生まれたその瞬間から彼はずっと家族と触れ合うことができなかった。

母はいつも父の傍に居ることを義務付けられ、傍を離れるときは4人以上の侍従に囲まれ、その行動を制限された。

自分と同様に父に疑われていたサイラスは寵愛という虚偽の状態のもと、四六時中監視され続けていた。

クラウスは比較的頻繁に自分のもとに来てくれたが、剣の修行にできるようになると城の中にあること事態が少なくなった。

シエリルファーナはいつも母と一緒に居るために自分に母と同様に自分に近づくことはできなかった。

幼かった頃のソルデイスの周りには機械のような侍従・侍女が自分の命を狙う刺客・・・自分に過大な期待を押し付ける神官しかいなかった。

抱きしめてくれる・・・抱きついてくる、腕。

その優しさ、暖かさ・・・それは春の日差しに包まれているかのように気持ちを解してくれる。

「起きたのか？」

鬘だけとっただけのサイラスが薄目を開けていたソルデイスに声

をかけた。

「もう少し、寝ていていいよ」

サイラスは器用に弟と妹の頭を自分の足の上乘せると、その髪の毛を優しく撫でてくれる。

初めて与えられる心地よい一時に、ソルデイスはまだ重い瞼をゆっくりと閉じた。

エピソード：そして、旅の始まり（後書き）

この話の中で一番穏やかな部分かもしれませんが。

ソルデイスにとり、守るべきものはこういう暖かい『何』かなのか
もしれません。

そして、この話もとりあえず此処で一端終了します。

ご読了、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8774b/>

リディア王国物語 王都脱出編

2010年10月8日14時00分発行